

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(一)

―夜討曾我・信田・十番切・大臣―

服部 幸造

名古屋市蓬左文庫蔵の「幸若音曲本」を翻刻する。

この本は、尾張藩の用人大道寺氏に伝えられた大道寺本の写しである。大道寺本については笹野堅『幸若舞曲集 序説』に書誌が紹介されている。(ただし、『同書』六三六頁の写真に「正尊」とあるのは「一満箱王」5ウ・6オの誤りである。)

蓬左文庫本は「春・夏・秋・冬」の四つの帙に分けて収められ、「春」には「夜討曾我・信田・十番切・大臣・兵庫・はま出・清重・俊寛・新曲」(「はま出・清重・俊寛」は合わせて一冊)の九曲七冊、「夏」には「やしま・安宅・一満箱王・景清・未来記・腰越・鞍馬出・馬揃・高館」(「未来記・腰越」「鞍馬出・馬揃」はそれぞれ合わせて一冊)の九曲七冊、「秋」には「伏見常繁・小袖乞・しつか・太識冠・元服曾我・入鹿・日本記・笛之巻・文学」(「日本記・笛之巻」は合わせて一冊)の九曲八冊、「冬」には「四国落・常繁問答・烏帽子折・正尊・敦盛・鎌田・わた・笈さかし」(「四国落・常繁問答」は合わせて一冊)の八曲七冊、全部で三十五曲、二十九冊である。

「笈さかし」23ウに「愛知県知多郡内海町大道寺家/蔵本謄写校合

了/昭和十年九月」とある。

なお、もとの大道寺本は『思文閣古書資料目録 第二百十号 善本特集 第一輯』(一九八九年七月)に掲載され、「やしま」1オ、「大臣」37ウ・38オ、および「入鹿」「わた」「元服曾我」「小袖乞」「伏見常繁」の表紙がカラー写真で紹介されている。これらの写真および『幸若舞曲集 序説』の写真と、蓬左文庫のものを比べると、蓬左文庫本は完全な透き写しであることがわかる。

翻刻に際しては原本に忠実であることを心がけたが、行は無視した。原本は一面九行である。原本の書き込み・訂正は適宜本文行の中にへくをつけて示した。節付は「」にくくって示した。「夜討曾我」には空白部のみがあり、節付はない。漢字の字体はほぼ「常用漢字表」に従ったが、一部にそれにはないものを使った。また、原本には多くの誤りがあるが、それらの個所には傍点(・)を付した。その他()はすべて私に付したものである。また、判読不能の個所は■で示した。

【校異】について

幸若系舞曲諸本の中で、それぞれの本がどのような位置にあるかの目安とするための「校異」を付けた。したがってこまかい異同は記さない。漢字・仮名の別、仮名遣いの別などは無視する。特に慶応大学本は違いが大きすぎるので、おおまかな校異のみを記す。複数の本を

あげた場合は、最初にあげた本の本文をかかげた。片仮名表記のものは平仮名に直した。また、〈節付〉は煩雑になるので「校異」の対象にはしなかった。たとえば、本文的にはほとんど一致する蓬左文庫本と松村本においても、〈節付〉や〈〉(これは現代仮名遣いにおける意味上の句読点ではなく、語りの上での句切に置かれているものである。)は一致しない。

この「校異」を通覧することによって、幸若系諸本をある程度分類することができるであろう。直熊本と打波本が紹介されたことによって、幸若系諸本のあらたな分類が必要となった。少なくとも小八郎家の伝本である毛利家本と直熊本とが大きく違い、直熊本と慶応大学本とが、曲によって部分的に近い関係にあることは、この「校異」によって明らかになるであろう。くわしい伝来は不明ながらも、幸若系諸本を分類するためには蓬左文庫本は都合のよい本であろう。

最後に、翻刻許可を賜った蓬左文庫にお礼申し上げます。

(夜討曾我)

去間右大将の御れう信濃の国三原野の御狩過其後相沢の原のいとりかり三日過て駿河の富士のすそ野へ御出とこそきこえけれ御れうの其日の御しやうぞく青かりきぬに立帽子尾花あし毛の一逸に白くらをかせてめされたり御馬そへには五郎丸赤地の錦の直垂をくだし給はつて是をきる力は八拾五人かちから青黄の腹巻をきごめにし君をしゆごし申

すちふぶ殿いしやうぞく鷹すゑて御供なり(1オ)

和田のよし盛かりしやうぞく鷹すゑて御供なり千葉小山宇津の宮いづれも狩場のいでたちにてたかすゑて御供なり惣して鷹は五十もと犬は八十四疋犬の鈴鷹の鈴くつわの音がざゝめいて上下六万六千余騎さしもに広き富士のすそのに駒のたてどはなし(1ウ)抑かの富士山と申すは仁王廿七代のみかとけいたたい天わうの御代せんき三年三月五日に一夜か内にこんりんざいよりゆじゆつしたる山なりあら面白の名山や南は(1ウ)

た子のうらなみややかぬしはやのけふりたつ西は海上まん／＼としてきはもなし(1)されはよの山をしもにするがの富士なれば雲より上のはちようは皆金銀のいさごにてまなごにもる白雪の所々は村きえて嶺には煙たえもなし麓に霞たな引て山の帯かとうたかはる山は八よう九そんにて両戒を表せり峯にはくじやく明王の住給へる池ありふもとにせんげん大菩薩のいらかをならべて立給ふ生々けんごの靈地と

(2オ)

して殺生戒をきんだんしれうしのいらぬやまなれはかせきの数は多かりけり(1)三千余人のせこのものぜんぢやうをまつくたりに岩をおこしこぼくをたゝきおめきさけんてかり下す多くのかせぎげだものすそのをさして下るわかき射手たちあいてをくんで我さきにと是をいとる此度富士野の巻狩東八ヶ国の大名小名或は鹿の四かしら五かしらとゝめ御所領給はつてみなしよち入と聞ふる(1)其中に曾我兄弟の人々は(2ウ)

しよの心のいらされは鹿の子のひとつもとゝめず 「」いかにして
もかたき助恒にめぐりあはでとたくみけるに爰に弓手のそわのかしわ
ぎ原の中をみる射手のあまたある中に四十計なる男の表紋のゆごてさ
しなつ毛のむかばきひつこうてみつあるしよに目をかけてかりまたつ
がつて追かくる時宗たそと見るにあわ助恒と見るからにきもそゝるき
身ふるひ優曇花も海中にひらけけるよとうれしくて鹿矢をそろりと捨
願みし中さしぬき(3オ)

いだし弓をふせて打つかひ矢つほは多しと申せ共我等か父の河津との
奥野々狩場のかへりあしの時鞍前輪のはつれむかばきの引合をいられ
給ふときくものをむくいひの矢なれは助恒をもおなし矢つほを射ておと
し河津か矢めにたかはすと諸人に見せ十八年か間のちそくはおなしか
らされとかり場と矢めはたがはずうてびひゝきたゝけはなる思ひは余
所にうかりけり身のせし科のむくいぞと知らせはやと思ひはやあらは
れ(3ウ)

て出けるか 「」までしはし我か心五郎一人無念をはれ十郎殿をむ
なくせは今生のうらみのみならずくわふせんまでもはれがたし父母
けうやうの矢なれは兄弟して一矢つゝとふらふにそとおもひあたりを
見ければ幸に尾ひとつへたて十郎殿よそ目してこそおはしけれ
「」五郎余りのうれしさに鹿こそ通れ十郎殿は御らんせられてさふ
か鹿そと云に心得て東西をきつと見る尾をへたてたるかたきなれは見
付ぬも道理五郎余り(4オ)

にたえかねて夏山やしげみの鹿は射にくさふその尾にあかつてせこ

にあひて行かたをとせ給へと申時さては此尾のあなたにかたきのあ
るそと心得てそはをのほりに胸かけあげてむかひの原をきつと見る実
も助恒爰にありしかもあたりには人なし天のをしへ仏神のあたへたま
ふとうれしくて十郎は兄なり一の矢をは何ものかさまたくへきと思ひ
てうつほの底の秘蔵のとめ矢をとつてからと打つかひ矢さきをさへ
はずかへしぢやう(4ウ)

の矢をと心得かたきの矢つほ計に目をかけて馬の足を見さりけり心は
はやれ共人に色をさとられじとこかけにすゝめあゆませ行にのつたる
馬は国本よりも飼は稀なり乗しげしよはき馬につよく手綱をのるほと
にとある伏木に胸をつき屏風を返すことくにはやまつさかさまたどう
どおつ五郎余りのかなしさに急駒よりとんでおり助成をとつて引立申
馬おこさんとひしめくまに助恒名馬にのつたれば谷峯へたてゝ打延ぬ
(5オ)

行がたしらねはいづくをさして尋て行へきかたもなし兄弟の人々宝の
山に入なからむなくかへる風情しうたでやみぬる兄弟心さしこそむ
ねんなれ 「いろ」助成涙をなかしつゝあらゆゝしのかたきのくわほ
うやうたてしのわれらかうんめい候 「」果報いみじき助恒をねら
へとも叶はず爰までのきはなれはいさや人目をつゝみ腹をきらん時宗
承り御説のごとく弓おれ矢つくとやらんもかやうの事をこそ申べけ
れ去なから爰は人めのしけう候(5ウ)

へはかんしよをもとめ御自害有へきなりと申し兄弟つれて帰るちゝふ
殿と和田殿此よしを御覽あつて重忠仰られけるはなふあれくよし盛

御らんせよ河津か子共の有様君に捨られ申みなし子となりはて中々と
んせい籠居もせで親のかたきやうたんとて年来つきそひねらふそや此
かりくらへも見えかくれのお供申て候をお供の為にはあらしびんぎよ
くはかたきになかれ矢ひとつと心さす望みにてこそ有らめと思ひつる
にたかはす(6オ)

して只今のあり様は目もあてられぬ次第也 「さし」あきのかりにか
りまたをさかさまにはくるならひは候らへ共ゆみ矢とる身の心さしま
ことやさしきものかなあのとこのばらかぶんとして助恒をねらふことは
「ふし」たうらうがおのとかやちうかあみに相同し 「我等
もわかき子共のあまた候らへはあすは身のうへにてか候らはんずらん
いさやかれらに心をそへ夕さり夜討にせさせん尤然るへしとて
「むかばきつゝみうちならして重忠発句をこそ出されけれ

「夏山や思ひ(6ウ)

しげみのこがるゝは 「義盛やかて付給ふ今宵ふじ野にとぶ火も
えいづ 「曾我兄弟は承りかり場のはのゆいすてはものさはか
しき次第かな去ながら我等をとふらひ給ふそや義盛の今宵富士のにと
ふひもえいつとあそはしつるは夕さりのくれ程に夜討にせよとの詞な
りそれをいかにと申すとぶ火といへる心はむかし太唐に諸国の武士を
めさんためちやうのつゝみと申て町にひとつゝ太鼓をかけほうくわ
をそへてをかれたり内裏にことのある(7オ)

ときほうくわをあげたいをうてばえんとうをんごくも一度におくり
「そくじに都へはせ上りていとを守護し申なり此ほうくわをは

なつけてとぶ火と是を申なり 「ことは」ひやうかくのときのかゝり
《火》我か朝にて夜討の時たい松と云事は此御代よりはしまれり異
国のあとを云出し我等に心をそへ給ふは狂言なからまことなるへし
「いさや我等も付申さんとて十郎殿とりあへすうへもなき恋のけ
ふりのあらはれて時宗やかて付にけりあまの岩戸をあけ(7ウ)

とへ君 「重忠義盛聞しめし扱は今宵をかぎり明なはあとを吊
へやあはれなりいたはしよにはどかりのなかりせはとふらひ矢をも
射つへしと涙をなかし日暮れは野宿に帰り給ひけり此人々もうれしく
て柴折むすぶ草屋形に啼々帰り給ひけり 「馬よくかへ鬼わうた
う三郎と人なみなみには下知し給へ共野べの草より其外は何をさして
か銅へぎぞよのやかたにはみちくたりとは申せ共曾我兄弟のやかた
には水より外はなし(8オ)

かくて夕さりかたきに逢へき身かつかれをなをさでいかせん町屋へ
行て宿とれたう三郎承ると申所へ長持一えたかいて来たる是はどれよ
りぞちふとのより曾我殿へおざつしやうと申すめてたしかき入よだ
う三郎取そなへける処に又長持一えたかいてきたる是はどれよりぞ三
浦とのより曾我殿へおさつしやうと申すあふめてたしこの間人の酒を
えてのうで其ふる舞のなかりしにわんれい爰にて有へし曾我とはた野
はりんけまね(8ウ)

きよせてしはひにる三々九度五度七度なさけをかけてもりながすもと
より助成時宗は用心なればよはさりけり 「馬飼つかれなをして
酒も過れば十郎殿時宗に暇を乞げご見ん為に出給ふ 「太刀はき

はさんてかたきのけごを閑に見て通るある屋形をみてあれは明日は鎌倉入あるへしとて馬の湯あらひ庭乗してひしめくやかたもあり又あるやかたを見てあれはたいこつゝみ打ならしどめいてあそぶ屋形もありかくみてとをりければあまり(9オ)

こくうにぞんじ東へまはつて家々の幕の紋をそ見たりけるくぎぬき松かわ木村五このきむら五は三浦の平六兵衛義村のもんなり石たゝみは信濃の国の住人ねんいの大大夫弥太扇は浅利の与一まふたる鶴はいわら左衛門庵の内に二つかしらのまふたるは駿河の国の住人「」天智天皇のぼつそん竹の下の孫八左衛門いたら貝はいわながたうあみのてはすがいたう大すながしは安田の三郎月に星はちば殿から笠はなごい殿うちわのもんはこだま(9ウ)

たうすそ黒にいろこがたは北条殿の紋なりつなぎ馬相馬折烏帽子立えほし第一大満大吉白一文字黒一文字は山の内のもんなり十文字は嶋津のもん車ははまのれうわうのぼつそん佐藤の紋竹笠は高橋たうきつこうわちがひ花うつほ三本からかさ雪おれ竹ふたつへいじ河越みつへいじうさみの左衛門二つかしらの右どもへ小山の判官三つ頭の左ともへ宇津の宮の弥三郎友綱かふら矢いせのみやがた水色は土岐殿四つめゆいは佐々木との(10オ)

中白は三浦のもんちゝぶ殿はこもんむらごうわりびしは武田の太郎梶原は矢はずのもんひた白は御所の御もんであり「」爰に庵の中にもつかうをあらゝとうつたる紋あり是は我等か家のもんそとおほしめし一しほなつかしくて十郎殿時をうつつして立せ給ふかゝりける処に

助恒かちやくし犬房と申すわつはまくの隙よりも見付父の御まへに参り十郎の御通りお申あれと申す助恒聞てやあ十郎とはたか事そ相沢の十郎か豊後に白木の十郎(10ウ)

か此度の御供に十郎のけみやう其教を知らすゑゝ汝はこくうなる事を申す物かなとしかられ時ならぬかはに紅葉をさつとちらしさん候いつそや三浦とのにて花見のけうの有し時舞まはせたまひたる相模の曾我の十郎の御通りと申す助恒聞て打笑ひあふ此者共か祖父伊藤殿こそ人のさかゆるをにくみほろぶるをよろこひし人の末なればかやうになり果て候そや昨日谷ごしにて見てあれはちたひ曾我殿は不足の人とおほしくてやせたる馬(11オ)

にこしぱりくら雑人の中に打紛れたるあり様は山田にたてるかゝしも是にはいかてまさるへき「」国よりも用のものはもたせすつかれにはのぞんづすいさんのためかやうでひとつのませよ承ると申てまくつかんで打あげ十郎の袂にすかり御入あれと申すみれはかたきのちやく犬ぼうなり尤とどうじてまくの内へそ入にける助恒片膝をおしたてしのひに刀のつかに手をかけわさとかびんぎか是へゝとしやうずる備前の大藤内此由を見るよりも助恒のしきだい(11ウ)

はやうある人そと思ひたゝ客はこなたへとしやうするあなたへなをらはやとおほしめすかいやゝあれはたもんにて以前より座しやうすこなたは一門の事くるしからしとおほしめし助恒かめてのざしきになをらせ給ふいまた助成の左右の膝なをらさりけるに助恒か初対面の詞こそ中々もつて無念なれまことやらん承はれはめんゝ某を親のかたき

との給ひてねらひ給ふと承るそれはもつての外のみがことなり御身の父の河津殿のよしなき事によつてうたれさせ給ひ(12オ)

て候を永々敷は候らへ共語てきかせ申さんに能々御聞分候て常は御入さふらへやたとへは頼朝十三にて伊豆の田中へはいしよある伊豆相模の人々寄相て評定するやうはたれか此君の父左馬のかうのとの御おんにあつからぬ人ある世にある人をなくさめ申すはそれはときのきらよきなき人をなくさめ申さんこそ侍のじゆんしにて候らへ尤と 동시에山こえよりも頼朝を「」伊藤のたちへいれ参らせて三日三夜のさかもりはことこえたるあそひなり「」あげ(12ウ)

くには若侍庭のかゝりにおりたつておこゑをあげてまりをけ君の御目にかゝる時頼朝南を御覽して山の高く見えたるはいかなる山と問給ふ若侍承り山の見えて候はかしはがたうげと申なりたぎつて瀧の落るをはまつかえが洩とも申さふ伊藤川の水上鎌田か洩とも申なり大せんじ山につゝいて候めいよの鹿の通ひ所鹿をからせて御見物我か君と申されたり頼朝聞しめし鹿は所望との給へは伊豆さかみの人々赤沢山にて三日(13オ)

のかりくら心詞も及はれず後には人々名残おしみのさかもりするしはいの事なれば爰にさしき中に青めなる石のたけ五尺計に見えたるを相模の国の住人に本間かとしは十九にくい石の有やうかな御座敷の煩すてんとて此石をおつ立持はもつて候らへ共たもつ所を知らずしてほんのさしきになをりけり当国の住人大場か舎弟またの五郎景久此由を見るよりもゐたる所をづんどたつて直垂ぬいでふわとすて此石をおつ

立ちうに(13ウ)

づんど指上さしきを二三度持てまはり候らひて是ほと石をはよのつねのつむてにこそうつへけれもたぬは国のなをりとしてはるか東へすてんとすかゝつし所にとうこくの住人岡崎の悪四郎義真のちやくしさなだの与一義貞其比歳は十三なり父の代官にやさしく見ゆる花うつげけちやうの直垂あかねのゆがけしちくの鞭あしかぶちなる駒にのりはるか東をうつて通るまた野急度見て爰元通らせ給ふ者はさなだ殿と見申たるか此石を参らせんす馬の(14オ)

上にて召れうづるか又おりたつて召れうづかなふさなだ殿とぞかけたりける「」さなだきいてどこともなやまたの殿もかさよりなぐる石したにてたまはるおこのものやはかはさふとわらつて通るまた野聞てふかくなりさなだ殿三浦にとつては古郡逸見の七郎岡崎の悪四郎大藤みさきすぎとも御一門の中におかたがたは器量の仁と承はつて候か此石召れぬ物ならばそれは三浦のなんにてはさふぬかいかにとかくるさなだ無念に存ずれはいそき駒(14ウ)

よりとんでおり竹笠直垂はらりとかなぐりすてそれ程の石をは二つも三つもとつくなげよとらんと申すめのとに文蔵家康御袂にすかりつきこはいかなる事を仰候そめのとやおや御供申ながら此石もしも召れそんずる物ならば大殿よりの御かんだうをは一向文蔵めかかうふらうするにて候になふいかなる事とけうくんをするさなだ聞てやあ教訓もことによるそ三浦のなんとかくるは無念なりそこはなせと云まゝにひかふる袂ふりきつて此石を待たりけりぢたひ(15オ)

また野は「」おこのものえいやつと云てなくなる五しやく計の大せきが花のごとくな与一か上へひらめいておつるを弓手にあひつけきつととつて馬手のかたへどうをぬてなんばうとつたぞまた野殿いでこの石を頓てかへし申さんとえいやつと云てなぐるまた野弓手にあひ付とりはとつて候らへ共力の落るしにははるか東へ捨たりけり伊豆相模の人々は此由を御覽しいやまた野十人力をさなだはもつてありやとて一度にどつとぞ笑ひけるときにとつてさなだ(15ウ)

どのはあつはれ弓矢の面目かな「」去間また野は諸人にどつとわらはれ科もなき四方をはつたとねめまはしかかる力わさは時によるすまひはとつて伊豆さかみの人々を相撲あいてに持申かた手をはなつて百日百夜うつともやはかはらはれ申へき伊豆の人々聞しめしこは無念なる次第かなとうごくのものか渡り相石をなげて取そんじ他国をかくるはいはれぬところあふ頓て心得たり伊豆は四郡相模は八郡小国と思ひなしていづをかくるは道理(16オ)

いつかみはねぎりのすまふにて有へし相撲をめさぬ物ならば弓矢を参らんとししめかるゝ伊豆かたには狩野の介もちみつさかみ方には土肥の次郎二人のぎやうじに出給へはすまひはすではじまりけり先一番にうち川の十郎よきすまひ八ばんうつていらいわかかわの弥二郎十七番うつていねぶ川廿三ばんくぬいの太郎九番うつまた野此よし見るよりも君の御座にて候にいつまで某出さるへき只今罷出独りころびしてあそばんと云まゝにすまひこしらへを(16ウ)

思ふさまに仕り場中へおとり出実もしせうのごとくよかつしすまひか

とつと出れはつきたをしつつと出れははたとはけたおし手にもためずしてはや五十九番うつたりけり今はしよはうのすまひかつきて候らはぬかすまひつきて候らはすはうちとめは景久さふそお暇申へしと云かゝりける処に土肥の次郎実平はさがみ方の行事にてましますはまた野かあたりへ立よつてあつはれ相撲やとつてきて目はやきすまふ心もきいたり力もつよし実やすまひつくれば(17オ)

ぎやうじ出てころぶよし承はれ共かのとも年よらせ給ふ哀といがとしを十も廿もとつてのけたらはまた野殿と一番とはな／＼とまいらぬかとしてから／＼と笑ひ給ふ去間また野はおとなの返事をこはく申すなんざふ土肥殿座しき座上にて益とつくめされんこそおとなにてはましますともかゝるあそひは老若をきらはぬならひにて候らへはたとひとい殿にてもまします御出候らへはな／＼と一番まいつて老のなみのかしはがたうげの赤土を付申さんと申す土肥との(17ウ)

聞し召れてわかいやつに詞をかけはぢかいたりとは思はれけれ共物の上手にてましますはさらぬていにもてなし給ひへフ其比伊藤の姫をといにをき土肥の姫を伊藤にをかる伊藤の御覽して此辺に河津はなきか土肥の次郎実平の腹立給ふ色を見ぬか是非河津かとらずは伊藤出てころばんとくるはれたりかわ津承りせんなさよとは存ずれ共父の仰にてある間おつとこたへておまへをさしすまひのこしらへひし／＼と仕りまた野を引立てつれてばなかへ(18オ)

出る時にひつたつる所にて人の力はしるゝものをむげにまた野はよわかりけり心の内に存すればかた手をはなつてばなかでうつて伊豆相模

の人々のしんるのはむらをやめはやと思ふかいや／＼名人にふかくをかゝするはかへつて河津かふかくなり 「」とつてのやうを人々に見せはやなんと思ひつゝはらりとひらき手さきを取てくるりとまはるすまひの手にはむかふつきさかつき鴨か入くび水車かくればはずす入ばあます桃花の節会の鳥あはせいさむ心は春駒の立とゝめぬか(18ウ)

風情して四十八手のとつてをは百やうにみたしたれば伊豆相模の人々は面白やとぞめかるゝいつまでと存れはまたのを人きわへかつはとつきたをしとつて引立おくる時かくても入たらはいしかるへき事共をうてたる跡を急度見てまぐましき相撲なれ共ゝなる木の根にけしとうでまた野は一期の不覚をかい候そ兄の大場か是をきゝすまひのかちまけ知らね共木の根は是にありと云伊藤殿御らんしてやあいかに河津よのつねの辻すまひなんとこそ人(19オ)

きわなんとゝ申す事は候らへすでにまた野は板東国に聞えたるすまひの上手ものその数にてなけれ共坂より東卅三か国か其内にすまひをとつて名人とよばれ申は身のふしやうまつはなしろに勝負を付よ河津とそいかられたる河津承り人のなさけのある時そ我等も情はこめらるれとる所と思ひてはらりとひらき手さきをとつてくるりとまはるまた野河津にふかくをかゝせん其為にくみ入につつと入あましてをくれをむずとつてまへのつぢ一しめしめ片(19ウ)

手をはなつてつゝけて二番どう／＼とうつたるはあふ中々いきたるかいぞなき 「」兄の大場か申けるは相撲をとるは常の事片手をはな

つてうつはうかそれはあいてをいやしむところいきてはかへるまじいと云土肥と伊藤かひとつになつてやうないはせそたゝ打ころせとひしめかるゝすでに弓矢に成へかりしを頼朝いかなる事と御教訓あれは御誼背きかたきによつてゆみ矢はとまりけり其すまひのいこんによつて御身のちゝの河津殿をはいわう山のこなたなる赤沢山のふもとにて(20オ)

兄の大場かうつたとも申弟のまた野かうつたるとも申す其比それかしは都にて伝きゝこは無念なる次第かないそき国に下り大場か館へおしよせ一矢射はやと思ひしに御身の祖父伊藤との某か代官のしわざなりとの給ひて国の留守にとゝめをくあふみやわたをめしとつてりふしんにきられ申すうらみの矢をもいたけれ共ひとつにはやうしの父母ふたつにえはし親三つにはくぶ 「」よつにしうと思ひながらも扱ありぬそれをこそあらんめ科もなきすけ恒を(20ウ)

親のかたきとねめんより常はさし入給ひて駒に水をけさするならば郎等とはよいわし家の子とこそ云へけれ馬なくはめん／＼さかへに多きあら馬を一疋とつてのらぬか直垂なくは大房かぬきかへをとりてき給へやけふよりしては助成と助恒と中にいしゆうは有ましいわゆの益さすそとて盃にひとつくみ十郎殿にさいたるは座敷の恥と思はれて無念たくゐはなかりけり 「」あら口惜やとふにつらさのまさるとはかやうの事をこそ申せをんしてをかの家(21オ)

の子にせんなんとゝいはれては親のかたきならずともしなでは何のゑきやらんくんたる酒を助恒か面にさつといつかけ一刀うらみ 「」

ともならはやと思ひしかまてしはし我か心時宗一人残しをきおなしよ
みちと云ながら本望をはとげさせて雑兵の手にかけてうき名なかさせん
する口惜さよとやせんかくやあらましと 「く」くんだりし酒をはは
しかねてそ見えにける二人のぢようは色を見て御盃の長もちはお着の
所望かやざしきにぢようの有なからいさやうた (21ウ)

ひて参らせん尤然るへしとて今やうなんとうたひけり助恒へ成思ひ
なをしつゝ時はかはると日はかはらし則今夜二人つれ夜討にせんずか
たきなりこのよの中の思出に何とも申せとかむまし去共心くるしきは
大藤内か見る目は西国武士のみる目なり二人のぢようの聞耳は東国の
人々の聞し召れん所にて現在おやのかたきをまのまへに置なからかか
るじさんをいはせつゝきゝなからへて立ぬるといはん後日の恥しゝ
「く」よしゝそれも夕さり今の恥をはすゝぐへしさのみざしき (22
オ)

に長居し無念度々重なり所々の死をして時宗にうらみられんよりとう
してたつにこそとおほしめし三ごんくんどうけながし夕さりは御番申
たく候らへ共北条殿の御かたへ申へき子細の候明日五郎ともない参り
ておめにかからんと座しきをたつて出さまにかたきの屋形のけごを心
閑に見すまし草やかたに帰る去間時宗は草屋形に有けるか十郎殿を待
かね申太刀おつとり出るとのへんにて参りあふいたはしや助成しは
くとして出来給ふ時宗見参らせ (22ウ)

十郎殿の涙のふせいの見え給ふ何事をおなけき候そや 「く」助成聞
し召れて某か涙のふせい別の子細にて候らはずかたき助恒に対面し初

対面の詞のこはかりし時さしちかへてとにもかくにも成へかりしをこ
へんに名残おしうしてつれなく命ながらへ二たひあふたるうれしさに
扱ぞ泪はこほるらん 「く」時宗承りあらありかたの御誼や候じひは
かみより下るとは今こそおもひしられて候らへかう申時宗ならば助成
の御事をは夢にも思ひ出ましたまにあふたるかたきなればとざしき
に (23オ)

なをらぬさきに 「く」さしちかへてとにもいかにもなるへきものを
おほしめし出され是までの御入は有かたふこそ候らへ 「く」はや
くかたきの屋形のでい御ものかたり候らへ承度候助成聞し召れてい
で語て聞せ申さん扱も頼朝の御果報いみしく御座有によつて北条殿の
給はりにてうすひわたに十八けんひた白のまくをうつて富士嵐にも
ませたるはたゝ白雲のたつたるにことならず国々の大名には駿河の国
にきつ川舟越高橋たう遠江の国に横路かつまた井の (23ウ)

八郎三河の国にあすけ東城ほしのぎやうめい尾張の国に本府海東熱田
の大ぐじ美濃の国に土岐遠山平野の平次蜂屋のくわんじやあしゝの四
郎近江の国にしこり佐々木山本柏木 「く」木村の源蔵なりつなやか
たをならへひつしとうつて君をしゆごし申すなり伊勢の国には加藤の
弥太郎伊賀の国には服部たう大和の国には宇野か一たう三千余騎筑紫
大名には大伴しよきやう菊池原田松浦たうこれたうこれずみべつき山
住やかたをならへ (24オ)

ひつしとうつ丹後の国には田辺の小大夫おほちのすゑたけ若狭の国に
はあかのかうけんちやうくにまさかはつしあをの太郎とはの兵衛越前

の国にはあまやしろさき堀江本城加賀の国には富樫のふんせい林の六郎井上左衛門能登の国には土田建部越中の国には石黒宮崎南部のとはらむくだの兵衛みやしの左衛門越後の国には五十嵐の小文次信濃の国にはにしたかなしうんの望月くはらきのあんとうしあんとうないねつの甚平これゆきかみの(24ウ)

すわのはうりしもの官のすわのはうりみやまかくれの甲斐源氏一条板垣南部下山逸見武田小笠原下野の国には那須しほの屋しよど佐竹の人々上総の国にはいほういなんちやうふくちやうなんあひろ川上うさ山のべ下総の国にはあんざいかなまりまるとうてう武蔵の国には横山たうひら山たうしんのたうたんのたうせいなたうこたまたう七たうこれたう惣して四十八たうの人々は屋形をならへひつしとつて君をしゆごし給ひけり相模の国には土肥土屋さんま岡崎さても(25オ)

ふところじま山の内の人々ひたはらまきの者共くんとんすけつね君のまちかきやかたには我等か一そくに武州にちよぶとの相州に和田殿しよしの別当に梶原平藤景時其外は千葉小山なしたほしたいんとんとそは内のとはらやかたをならへ打つつけ君をしゆごし申なりかたきのやかたは八せん八なかなれなり馬はついで人はらんぐいきまん国の鬼王とらせん国のらわう鬼をからめしはくたわうつなきんとときやうゆふ田村のしんとよご將軍二相をさとる人なりともたやすく此陣で親の(25ウ)

かたきを討とつてやすくと出ん事思ひもよらぬ事なれ共御身と某と心ひとつであらふそとべんぜつはたらふた詞に花をさかせ二時計物語

おく床しくそ聞えける「」去問時宗は十郎殿の御物語を大息ついで聞居たり「」扱は案内くもりなし夜更は思ひ立へし「」宵の間の慰に文共書したゝめて古里へ言伝ん尤然るへしとてやたて巻物取出し油火少かきたて有し昔の思ひより今のうき身の果までをことこまかにそ書れける「」十郎殿はともすれは大磯の(26オ)

虎か名残を書れたり五郎か筆のすさみには箱根の別当の御事さて其外はいつれもおなし文章也けり時宗か悦ひ申けるはふしぎに最後の時大かたとのに参りふけうゆるされ申父母教養のいのちを富士のすそのに捨をき骨をやぐわいにうつむとも名をばん天にあぐる事ちよかこたれは取つたふ家引おこす弓矢のなれうもんにほねはくちなからかもんの名をうづまきんぎよくのこゑはさんしゆぢくえんたうまてくもりなし「」ひつかにこれおもんみるにたうをに(26ウ)

きり釧をたいし弓馬の道にたどさはり戦場に出てめいをすつ是後名の為なりき「」ふほしうねんの敷にはかなしみをさんこの時差をうけしう八せいの愁歎はたふたりのみ歎ありとしたけ月日さつてのち于時建久四年さつきの末の八の夜の「」天はくらしと申せ共思ひは今宵晴るなり助成判とき宗判と書とよめ次第の形見を取あつめ筆を捨てそ啼にける「」助成には鬼わう時宗にはだう三郎と二人の者をめされ文をはおうへよ参らせよ弓うつほをはそが(27オ)

どのへはだのまほりとびんのかみをは箱根の別当の御かたへ馬と鞍をはわとの原おんないしうの形見そと思ひ出さん折節は念仏申てえさすへし「」わさと文にはかゝぬそおうへにて申へき事は給はりたる

おんぞを身にまとひかたきとあふてしなん事いきてのめんぼく死ての名たゝ最後に母上を拜み申す心地してとかやうにきて出つると

「語申せと云なから又はら／＼と啼にけり」「おにわうもたう三郎も涙にくれて御返事を申かねたる計なりさのみ涙にむせびてもはゞ(27ウ)

かり多き事なればしやく取なをし申けるはいづくにていかほと見おとされ申かゝる御説のくたるそや兄弟の人々のあれ程多きかたきをうたんと出たち給ふ所にたゝふたりあるけにんか見捨てかへるほうやさふあらうらめしいとの御説かなたとへは仰に随ひかた見の物を給はり

「曾我古里に下りつゝ初て人を頼むとも普代の主を見捨てしなぬ程のゆいかひなしはなんの用に立んとてたれやの人か目をかけんとひ入道仕り世をいとふ身となりたりと恩を知らせやつ(28オ)

ばらか道心いかゝ有へきとてうしろゆびをさゝるゝならば出家しても面目有まし上臆も下らうも死へきときにしなねはいきがいほ更にさふらはす

「いかにやとの鬼王丸夜討をへのお供をこそ申さすと臆病なるくわじやばらか腹切やうをみせ申さんにこゝへよれやと云まゝにたかひに刀をぬきもつて南無阿弥陀仏を最後にてさしちかへんとぞしたりける助成も時宗もあはてゝ中へとんで入二人を左右へおしのけてあふ思ひきつたり汝等

「されはせんだんの林はけいきよ(28ウ)

くまてかんばんしく宝地のいさこは皆金玉と成風情我等か思ひ切たれば汝等も思ひ切けるそやみおとす事はなきそとよ心さしにたゝ下れ國へ

形見を届すは時のちんじ一旦の口論に死たりと人もおもひ母上も思召されん口惜さに態と下すたゝ下れ縦千騎万騎みかたにありと申すも此富士野にては思ひもよらす唯一人なりとも忍ひ入はうち系なん人あまたにて叶ふましいそはやとく／＼と仰ければあかぬは君の御説とて形見と文を給はり主なき(29オ)

駒の口を引

「ゆかんとすれば五月團扇にくれて道見えす思ひするがの富士の根のけふりは空に横おれてへたての雲となりにけりすそのゝ草は露しけくまだ秋ならぬ道野べに螢かすかに飛つれて身より思ひの余りに虫さへむねをこかすらんいとゝ涙の多かるに何とかわづのなきそへて井出の屋形をわかるらん馬も心かあればこそほくふうにいばいけめ実心なき畜類もなるればしたふならひありましてやいはん人輪にかたちにかけのそふことくふたひさうでん(29ウ)

めしつかはれへへあくれば鬼わうくるれば又たう三郎と召つかはれ申せしか今宵はなれてあすより後助成ともとき宗ともたれをか申てなくさむへきおなしうき世に生るゝとも曾我の十郎時宗のそのへ殿人てなかりせはかほとにものはおもふましわれらはかりとおもへともむかしをつたへてきく時は悉達たいしは十九にてわうぐうをしのひ出だんどくせんのほうれいあらゝせにんをしとたのみ御出家ならせ給ひしときたまのかふりいしの帯ぎよい(30オ)

もろともにぬきすてゝ金札をかきそへてこんれい駒もろともにわうぐうへかへし給ひけりこんれい駒もしやのくも君のわかれをかなしみてせんこくにいばいひるいていきうをせしこともいまの我等に相おなし

それはほとけのさいどにて終にはめぐりあひ給ふかのすけなりや時宗にこよひはなれてあすよりも又もあふへききみならず名残おしとも中へに申すもをろかなりけり 「」きやうだひの人々仰けるはあらうれしや此もの共富士のはらをは過ぬらん (30ウ)

いさや最後のいでたちせんもつともしかるへしとて十郎殿の其夜のしやうそくはだにはおうへより給はる小袖ひつちかへてきるまゝに村ちとりのひたゝれのそばたからかにさしはさみくろさやまきのかたなをさいて三尺五寸のしやくどう作りの太刀はいてまきのたい松一尺二寸にたはねたるをゆん手のわきにかいこうて火はもつたるか時宗とてさきにすゝんで出たまふ五郎か其日のしやうぞく是もはたにはおうへより給はるこそてひつちかへてきるまゝにうへには (31オ)

さいみに墨絵にうを三つ二つところへにつけさせしもはこんのこはかまのそばたからかにさしはさみあかぎのつかのかたなをさいて別当よりたまはつたるひやうこくさりの太刀はいてどうの火もつてそ出にけるしのひてかたきをねらふ夜はくらきにしくはあらねとも辻々のかゝり火は天をもてらす計なりくさの下なるほそ道までもかくるへきやうのあらされはたゝ日中のことくなりされともとねり草かりの馬飼ていにもてなしやかたへくの前を過る (31ウ)

あやしやたそととかむれはこれはみうち草かりなりとこたへてかりやの御れうの御所中へ忍ひいるこそあぶなけれ宵に見たりし事なればまよふへきにてさふらはす数千のかとを行過助恒かやかたへしのひいにることによくしづまつて人げもさふなくせざりけりあふこゝろにく

しいぶせし用心はたれもかくするものをさためて人のまつらんとがめはやかてみたれ入て目貫をかきりに打やうへしやあそれまてはしのべとてたい松に火をたて (32オ)

しつかにふつて見たりければあら何ともなや大藤内にいさめられやかたをかへて爰にねず惣して人を置されは二人なからあきれてさていかになりなんゆんではやかて御所なりめてはちゝぶまへはわだうしろの陣は横山けいごのぶしはかゝりさき 「」矢さきをそろへたてをつき御用心と呼はるはたゝなるかみのことくなりうんかつきてさとられかたき屋形をかへにけり兄弟の人々 「」羽ぬけの鳥の中空にたちわつらふそあはれなる 「」かゝりける処に腹巻 (32ウ)

きたるおとこの長刀もつてよりければきやうだいの人々あわかたきそと思ひ太刀とりなをしかゝりやうされとも此おとこ長刀とりもなをさすしこゝゑになつて申けるはなふくるしうも候らはすちゝふ殿のこうけんに本田の次郎親恒にて候きのふかりばの場の云すてのゆみ矢のなさをとはん為に本田を出したてられて候助恒は宵まではこのやかたにありつるか大藤内にいさめられ御所のひたりの妻戸のきわにしゆくしたり先たい松をも (33オ)

ふりしめし太刀をもさやにおさめよ 「」いやたそと云ともいふなちかつねにいわせよこちへくと袖を引うれしきたくゑかきりなし中もんわたりらうむまのまへ行過あやしやたそととかむれはちゝふ殿のこうけん本田次郎親恒ひはんすると云ければさらにとかむる人はなし和田の手の人々よし盛かねて今夜はひそかなれとしめされ人もさ

らにかめす御しうと北条殿五郎かえほし親なれば色かねてさとり何事ありと今夜はさうなく走り(33ウ)

出るなとしのひ／＼にふれらるゝ心得たる屋形には東西ひつそとしたりけりかくはすれとどさまのもの何事もあれかしときの高名つかまつり御感にまかりあつからんなんとゝおもふもの共いれちかへてまはれとされとも本田つきそひ引まはしとをればさらにしきひはなかりけり

「かくて兄弟の人々をすけつねかふしたりし妻戸のきわへ押入人数に親恒も御供せんと申す助成聞し召れてまことの時の心さしちゝふ殿の御ほうし本田殿(34オ)

の御なさけはとかふ申すに及はれす「もしも此事しおふせて雑兵の手にかゝらんとき御手にかけてなき跡をとりかくし給ひなは最後の供にはまさりなん「人あまたにて叶ふましいはやとく／＼と仰ければ本田承りあふ実々是もいはれて候さらはおいとま申すとて本田はやとへかへりぬ「たかひにとりつたへたるゆみやのなさけ爰までと二人目と／＼見あはせて「なぜはいつもふけ共こよひ

の風そ身にはしむ名こりはいつもおしけれと今宵(34ウ)

殊更おしきなり一日か間に一千歳をふるるとは云とも万年か其内にも兄弟となる事かたかるへし今宵はなれて其後にみらひのちきりきためなしいまたかたきにあはぬまにわかれのすかたよくみんなちゝ幽霊か見たくは助なりを見給へや母かうそうと思ひて時宗をみるとてたい松はつとふりたてゝたかひにかほを見合てもろきは今のなみたなりかゝりけるところにかせもふかぬに妻戸かなつてきり／＼ばつとひらいた兄弟

の人／＼左右のわきに(35オ)

ひつこうてすまひてものを見給へは女にてこそ候らひけれ宵に見たりしけいせいかたれなるらんと思ひしに大礮の虎か妹にきじゆと申すもの御所中にありつるかとのはらの夜討のよしを夢はかりほのきいてもしさもあらは此妻戸のかけがねをはずさんために宵よりも待こそ久しくさふらひつれなふこなたへいらせたまへとてかきけすやうにうせにけり妻戸はあいつ人はなしさらはたい松をたてよとてたい松に火をたてしづかにふつてみたりければ(35ウ)

郎等共はをそれてよひよりもつかさる座しきには大藤内とすけ恒たゝ二人しゆくしたり助なり御らんあつていかにや五郎かたきを見るに二人我等も兄弟ごへんはそばにふしたる大藤内をきれ助成はすけ恒をきるへきとこそおほせけれとき宗うけ給はりこは御誕とも存知候らはす五つや三つの歳よりも十八年か間ねらひたまあふたる親の敵をはさしをき行ゑもしらぬものをきつては何のえきやらんそうりやうにてましませは一の太刀は(36オ)

あそはせ二の太刀をいとは時宗かつかまつらんと申すすけ成きこしめされてあふおもひあやまつて候たゝしねいりたるものをきるは死人をきるににたるへしあつたら親のかたきの生顔を見ていさやきらんもつともしかるへしとてあとやまくらに立よりて太刀をはさかてにとりなをして申ける事こそあはれなれ「三千年に一度花さききみのなる西王母のへか／＼桃「たうくわのせちゑうどんげの花おやのかたきにあふはまれなるとは申せ共(36ウ)

おもへはやすかりけるそやいかにやとのすけ恒大じのかたきをもつものかかくふかくに見ゆるかおきあひてじんじやうにしね宵の念仏はいねんはたゝいまの十ねん申されよちやうもんせん大藤内かさかしら今こそする所おきあへやつといふまゝにあゆみのいたをとうとふむすけ恒か最後もよかりけりさつしつたりと云まゝにをとるきさまに枕なる太刀おつとりすはとぬきおきんとしけるところを「」助成是にありやとてもつてひらいてちやう(37オ)

とうつ弓手のかたからめての乳の下へはらりづんどきつた時宗是にありやとてもつてひらいてちやうとうつこしのつかひきりはなす五郎か太刀は鋸にてたゝみ三でううらかへしあゆみのいたにきりつけえいやつと云てひくまにすけ成またはたときるときむねつばをかへしとつてなをしてちやうとさるせめてもきつてなくさみ日比のねんやはるゝとおとりあかりとびあかり三刀つゝさるほとにくわほういみしき助恒も六になつてそ(37ウ)

ころびけりそばにふしたる大藤内太刀風に目をさましかつはとをきてにげけるかにげはたゝもにけずし夜討は曾我のとのはら明日のしよけんは大藤内とのゝしつてもみにまふでそにげにけりすけ成御らんしてにくいやつかたゝいまのことばかなにげばにがさんとおもひしにしよけんといふかにくげに人とちぎるはさはなひそともにつれてごくそつのかしやくのせめのしよけんにまかりたてとの給ひすけなりの太刀にて片もゝ切ておと(38オ)

されのつけにかへすとこちをときむねこれにありやとてほそくびちり

に打おとすおとゝいあんと給はりせんない人にかたらはれ非業の死をしたりし大藤内か最後をはきせん上下おしなべにくまぬものはなかりけり(38ウ)

【校異】

本曲において校異に使用した本は次のとおり。(松)松村本(藤井氏一本)、(毛)毛利家本、(打)打波家本(福井大学本)、(慶)慶応大学伝小八郎本、(直)幸若直熊本。

1オ ○是をきる―(打)きるまゝに ○ちゝぶ殿…和田のよし盛…

御供なり―(慶・直)ナシ

1ウ ○三月五日―(他本)三月十五日

2ウ ○ぜんぢやうを―(打)三日かけて以前よりそはを、(直)三日

かけていぜんより絶頂を真下 ○是をいてとる―(慶・直)いてとれはまきかりと是を名付たり ○御所領給はつて―(毛・打・

直)君の御目にかゝり御所領たまはつて

3ウ ○奥野ゝ狩場のかへりあしの時―(松・毛)おくのゝかへりあしのととき、(打)おくのゝかへり有とき、(慶・直)おく野ゝ狩は

の帰りあしに

4オ ○見付ぬも道理―(松・毛)みつけぬはげにもだうり、(打)見つけぬは道理、(慶・直)みつけぬもひとつどをり

4ウ ○うつほ―(慶)あひら

5オ ○心ははやれ共―(直)心わやたけにはやれども

5ウ ○行がたしらねはいづくをさして―(慶)ナシ ○人目をつゝみ―(慶)こゝにて、(直)人目をつゝみ去来 ○申べけれ―(毛)・(慶)申せ、(直)申つらん

6オ ○捨られ申―(松)すてられまいらせ

7ウ ○かゝり(火)―(松・毛・打・慶)「火」ナシ、(直)篝(カゞリビ) ○異国のあとを：心をそへ―(慶)我等をとふらひ、(直)異国の跡を云出して我等を訪

8オ ○よのやかたには：かくて―(慶・直)ナシ

8ウ ○めてたしかき入よ―(慶)ナシ

9オ ○太刀はきはさんて―(慶・直)太刀おつとりわきはさみ ○かたきのけごを―(松・毛・打)かたきのやかたのけごを、(慶・直)やかたのけごを ○又あるやかたを：屋形もあり―(慶・直)ナシ

9ウ ○信濃の国の住人ねんいの大夫―(毛)信濃の国根井の大部

10ウ ○あら／＼と―(他本)あり／＼と ○かゝりける処に―(慶)ナシ、(直)「補筆」 ○犬房と申す―(毛・打・直)犬房といつし ○相沢の十郎か：白木の十郎か―(打)あいさは十郎かふんこにうすきの十郎かかつまたに遠江の十郎か、(慶)ナシ、

11ウ ○豊後に白杵の十郎か遠江に勝間田の十郎か
(直)承ると申て―(慶)犬房な／＼めによるこふで ○びんぎか―(他本)びんぎさうか

12オ ○あなたへ―(慶)祐成御覽してあなたへ、(直)祐成これを見

てあなたへ ○無念なれ―(毛)口惜けれ

12ウ ○ときのきら―(慶)時のけう時のはなをかさずならひ

14ウ ○又おりたつて召れうづか―(打)ナシ ○御一門の中におかたがたは―(慶・直)この人々のなかに真田殿は ○器量の仁と承はつて―(松・打・直)きこふるきりやうの仁とうけたまはつて、(毛)聞ふる器量の仁とうけたまはり及びて、(慶)きよふの人と承るか ○いそき駒よりとんでおり―(慶・直)こまをかしこに乗りはなち

15オ ○文蔵家康―(毛)乳人の分蔵、(打・直)めのとにふんさう

16オ ○科もなき四方をはつたと―(毛)ちつとも科もなき四方をきつと、(打・慶・直)ちつとも科もなき四方をはつたと ○かゝる力わさは―(毛・打・慶・直)めん／＼は何を笑ひ給ふそかゝる力わさは ○石をなげて―(慶)やうやく

16ウ ○八ばん―(他本)九番 ○此よし見るよりも―(慶)申ける

17オ ○思ふさまに―(慶・直)ひし／＼と ○今は―(慶・直)またの申けるは今は ○かゝりける処に―(慶・直)ナシ ○また野かあたりへ―(慶)する／＼と

17ウ ○かのとの―(慶)またの殿 ○一番とはな／＼と―(慶)はな／＼と、(直)一番 ○御出候らへはな／＼と―(毛)花／＼と
18オ ○伊藤の…土肥の…をかる―(慶)土肥のひめを伊藤におかる

伊藤のひめを土肥におかる ○おまへをさしー(毛) 座敷をたち
(松・打・慶) 御前を立 ○ひし〜と仕りー(慶) おもふさま
にしつくりい

18ウ ○かた手をはなつてー(毛) 前のつしーしめしめ片手を放て

19オ ○面白やとー(慶) ナシ

20オ ○申けるはー(毛・打・慶・直) 是を見て ○すでに弓矢に：

頼朝ー(慶) 頼朝御覧あつて、(直) 頼朝聆召れて ○ゆみ矢はー
(毛・慶・直) 其時の弓矢は

20ウ ○いそぎー(慶) そのきならば ○一矢射はやー(慶) はらき
らせはや

21オ ○かやうの事をこそ申せー(打・直) 今こそおもひしられたり

22オ ○さのみー(慶・直) 角て

22ウ ○三ごんくんであうけながしー(直) ナシ ○申へき子細ー
(慶) ちつと申たきこと、(直) 些と申べきしさいの ○かたきの
屋形のけごー(慶) 内のけこ ○草屋形に有けるかー(毛) ナシ

○かとのへんにて参りあふー(慶・直) ナシ

23オ ○ふせいの見え給ふー(毛・打・直) 風情は、(慶) 色の見えた
まふは ○ありかたの御謎や候ー(毛) 有かたや ○じひはかみ

より：候らへー(慶・直) ナシ ○助成の御事をは：出ましいー
(毛・慶・直) ナシ ○かたきなればとー(松・毛・打・直) か

たきなればとおもひ、(慶) おやのかたきなればとおもひ祐成の
御事をは夢にもおもひいだし申まじい

23ウ ○いでー(毛・打・慶・直) 安きほとこの事いて〜、(松) いで
〜 ○北条殿の給はりにてー(慶・直) ナシ ○たつたるにこ
とならずー(毛・慶・直) たつたるか如し

24オ ○大ぐじー(慶・直) 大宮司山田の左衛門

26オ ○十郎殿の御物語をー(慶) くわしくうけたまはつて

27オ ○思ひはー(打) ナシ

27ウ ○馬と鞍ー(慶・直) むちとゆかけをば二のみやのあねござん
にまいらせよ馬と鞍

28ウ ○臆病なるー(松・毛・打・直) おくびやうしごくの ○云
まゝにー(毛・慶・直) いふまゝに大はたぬきにはたぬひて ○

たかひに刀をぬきもつてー(慶) 腰の刀をひんぬいて、(直) 腰の
刀をさつとぬき ○左右へー(毛) ナシ

30ウ ○きやうだひの人々ー(慶・直) 祐成 ○あらうれしやー
(直) 今わはや

31オ ○三尺五寸のー(毛・慶・直) 別当よりたまはつたる三尺五寸
の

31ウ ○ひやうこくさりー(松・毛) 二尺七寸候らひしひやうこぐさ
り、(打・慶・直) 二尺七寸のひやうこくさり

32オ ○しづまつて：こゝろにくしー(打) ナシ ○さためて人のま
つらんにー(打) ナシ

32ウ ○あら何ともなやー(打) ナシ ○あはれなるー(慶・直) む
ざんなる ○かゝりける処にー(慶・直) こゝに

33 オ ○ひたりの妻戸―(松)ひだりの一のみつまで

33 ウ ○袖を引―(他本)手をぞ引

34 オ ○かくて兄弟の人々を―(慶)ナシ ○聞し召れて―(毛)申されけるは

34 ウ ○仰ければ本田承り―(松・毛)ありしかはほんだうけたまはり、(慶)ありしかば、(直)ありければ ○やとへ―(他本)はや

35 オ ○今宵―(慶)七度契りて兄となり六度むつびておとよとなる今夜 ○かゝりけるところに―(慶)ナシ ○左右のわきに―(毛・直)あは仇そと思ひ左右の脇に

35 ウ ○ひつこうて―(他本)ひつそふて ○首に見たりしけいせいか―(打)ナシ ○きじゆと申す…ありつるか―(慶)ぎすと申て候ひしが ○とのはら―(他本)そが殿ばら ○さらはたい松をたてよとて―(慶)ナシ

36 オ ○御らんあつて―(慶・直)おほせけるやうは ○間ねらひたまあふたる―(慶・直)そのあいだこゝろをつくしねらひたる

36 ウ ○いさや―(打)ナシ、(慶・直)いざ

37 オ ○一ねん―(慶・直)十念 ○十ねん―(慶・直)一念

37 ウ ○たゞみ三でうらかへし―(慶・直)ナシ

(信田)

既に承平は七年にてかいげんす。天慶九年にかはる。天略十三年乙の

卯。弥生半の比。相馬殿の姫君をお山の太郎にとらせらるゝ。小山の太郎行重は。望む心の叶ふ上。悦び是にしかじとて。むかへもてなしかしつき申す。一には仁義の法と云。草の陰なる相馬殿の。おほしめされんする所もあり。けうやうふかく申さんとて。さんがの殺生をきんたんし。思ひいりてそとふらひける。信田にまします御みたひ所つたへ聞し召れて。小山の太郎行重をは。あらおとこ(1オ)

かと思ひてあれは。情のみ有ものなり。親の事を思ふものたにも世には稀なる事ぞかし。ましてや見もせぬしうとを。かやうにふかくとふらふは。よつく頼もしき心かな。時々こなたへ来れかし。相馬殿の形見とも見はやとこそ仰けれ。有時御台所。浮嶋大夫をめて仰合られけるは。相馬殿の最後の時。おほしめしや忘れけん。是ほと多き所領を。姫に一所もゆつりなし。聲の思ふ所もあり。いづくにてもすこしはからひさぶらへ。うき嶋承り。謹而しは御返事(1ウ)

を申さず。やゝありて申けるは。相馬殿もあしき事はいかでおおほしめし置くべき。弓取の公達にひめごは終に他人となる。聲は一生近からず。うつれはかはる世のならひ。わりなくおほし召れさふらは。折々の引出物に。宝はつくさせ給ふとも。所領にをめては。一所もゆつらせ給ふへからず。人にはとんよくこまふとて。よくしん内にふくめは。したしき中もうとうなり候。よそくなからの御対面こそ。中々末の世までも。めてたくわたらせ給ふへけれ。「カ、ル」小山殿に御対面は。「フシ同」むやくの(2オ)

御事たるへしと。もつての外に。申けり。「クトキ」御台きこし召れ

御返事なうて立せ給ひ。いつしか相馬にすぎをくれ。一周忌だにも過ぎるに。内ものさへかろしめておかしきものと思はる。果報の程のつたなさま。中々うき世にあり顔に。家をもちても何かせん。信田とのに暇を乞。〔フシ同〕たつとき。山のかくれがにも。引こもらはや。なんと。ふかくそ恨給ひける。〔コトハ〕信田殿きこし召れて。母ごの御うらみは御道理。御意にもれてはせんなしとて。信田の庄を半分わけ。はゝ上に(2ウ)

奉る。母上なゝめにおほしめし。小山か館へ送らせたまふ。お山なゝめに悦ふで。〔ツメ同〕一は聳入又一は悦びの所知入なりければ。あじろの輿は八ちやう。はり輿は十二ちやう惣して騎馬は三百騎。上下はなめきゆゝしくして。信田の館へそ移られける。あたらし殿を造らせ。かくて爰に住給ひ。いまみたち殿とはへり。信田の先祖の郎等共日々に仕隙もなし。去共うき嶋父六人は。折々計の出仕にて。さなからおまへに詰されは。御みたひの御意もうすくなるあふなに(3オ)

はに付て昔よりも。物うき事共多くして心のとまる事もなしよのありさまを見るに付。後の世あやふかりければ。ながらへざらぬ物ゆへ。しやいつまてと思ひ切。信田のかわちに引こもり。あんきよしてこそそるたりけれ。〔コトハ〕御台此よしを御覽して。あらおかしのうき嶋か振舞やさふらふ。そもあのうき嶋を。郎等にもたぬものは。世をは過ぬものか。お山との一人だにも有ならは。なんの子細の有へきと。悦ひをなしてさかへ給ふ。去なから。浮嶋大夫はいんぎよしぬ。信田

は(3ウ)

いまたようちなり。大事のぢけんまるかし。家につたはる重宝を。内にきてはせんなしとて。ひとつも残さす押まくつて。お山の太郎に預らる。有時お山。人なき所に引こもつて委見るに。まさかと代々よりも持つたへたるせうもん共。ひとつも残らず爰にあり。何々信田玉作り。当城は八万丁の所。あらおびたゝしや。此内わづか壱万町を。某知行するさへ不足なきに。ましてや残る七万丁。常陸下総兩國の。大炊介となるならば。我にましたる弓取の。他に(4オ)

ふたりとも有へきかとて。頓て大よくしんぞ出きたる。懸る目出度重宝を。さふなく預る事は。天のあたへと存すれば。安堵を申さんする其ために。熊野詣にことよせて。〔ツメ〕急国をうつ立て。みやこへぞ上りける。関白天下に付申。安堵のむねを奏聞申す。内よりの宣旨には。相馬か跡を申は。何ものぞとの宣旨なり。相馬か為には一子て候。ゆづりのてつきせうもん共。代々のくじよ共を。しせうたゝしく参らせあげ。理非をすまひて奏聞す。其上(4ウ)

国はうとくなり。ようにもしよしにもへつたうにも。宝をあかせていさませたり。君にもこかね。龍の馬れうら金銀のたぐゑを。数を尽して参らせ上る。左り右の大臣。後の宮女房達其外の人々にも。たからをあかせていさませたりけり。たとへは敵はうさゝうるとも。なとかはかなはで有へき。ましてあらそふものはなし。むぐう自在に申なし。あんどを給はり下りけり。〔コトハ〕去問お山。道々案じけるやうは。御台所と信田殿に。少分なりともとらせ。ふちせばやとおもふが(5)

オ)

。いやへく。かゝる六かしきものをたすけをき。後の世のわつらひとなる事もあり。たちまちうしなはばやと思ふが。それも余り情なし。所詮は。領内にをかぬまでと思ひ。国もとに着しかは。さきに人をたて。御台所と信田殿。いたはしくは存ずれ共。ひたち下総兩國にあんどは叶ふへからず。遠き国のしらぬ里へ。とつく落行給へ。片時も国にましく。我はしうらみ給ふなど。おつたての使をたつる。「サシクトキ」みだひ此よしを聞き召れ。偏に夢の心地してうつとさらにかわきまへ給はず。お山殿が(5ウ)

所存には天魔はじゆんが入かはりたるか。いかなる事にてかくいふそと。くどき歎給へ共。あらけなき使にて。哀を捨てふるまへは。「フシ同」うき嶋大夫か。詞のすゑ今さら。思ひ出さるゝ。扱有へきにてあらされは。信田殿計お供にて。涙とともに出給ふ。けふ出て又帰るへき道たにも。別といへは物うきに。けふ出ての其後に。かへらん事もかたかるへし。行もとまるも。をしなべてもろきは今の涙かな。甲斐の国に聞えたる。板垣の里と云所に。尋ぬへき人あり(8オ)

て。かの里までは落行給へと尋る人も跡なくなる。なにはに付てたよりなし。今はいつくへ行べきぞ。名はいたがきと聞けれど。風もたまらぬ。あばら屋に宿。かりてこそおはしけれ。「コトハ」めつらしからぬ申事にては候らへ共。たのもしき与取のらうどうなり。信田の先祖の郎等に。さつ嶋兵衛戸板の太郎。此人々を先として。以上十一人あとをしい申し。板垣の里に参り。君を見付奉り。嬉しと云も中々

に。申すに及ばざりけり。扱々いかゝ有(6ウ)

へきと。内儀評定とりくなり。其中にとつても。さつ嶋兵衛申けるは。我等か先祖さつ嶋大夫。らうどう主君の契約を申し。君も我等も三だい。承平の合戦はじまつて。数度のたゝかひありしかども。終にふかくをかゝざりした。君もにやくに御座ある。我等もわかきものなれは。お山殿にいやしまれ。本領わうりやうして追出し申むんさよ「ツメ同」いつまでかくてこらふへきかたきは大せいなりともぶせいでうかぶ計略夜討にしくはよも(7オ)

あらじ。本より我等案内者。隙をうかゝひしのひ入。三方よりも火をかけ。一方よりもきつて入。千騎万騎か中なりとも。思ふかたきはたゝ一人。お山とくまんず事共は。なんの子細の有へきとはや手にとるやうにぞたくみける。其中にとつても。といだの太郎か是をきゝ。是こそよからぬせんぎなれ。りを持たからのあらせんぎは思ひもよらぬ事にて候。さいさんつがうたさたにてなし。一問答二問答。三もん三たうつがひ。まけおはつたるさを(7ウ)

たにも。おつそふかんと名付て又取立るはさたのほうましてや。一度もせさらぬ沙汰を。てきはうさゝへぬ其さきに。むぐうに申なして。給はる所なり。あれはまさしき他生。是は相馬の御事は。世にはかくれもまします。たとへは証文あなたにありとも盗とられししよけんをたて。なとかはとつてかへさざらんと。りをすまひて云ければ。尤此儀にどうするとて。御台所と信田殿をあふぐしてみやこへ上りけり「コトハ」つゝむとすれと此事。お山の太郎(8オ)

つたへき。ゑゝをんをしらぬ者はたゞ木石のごとし。あはれみを持たれてたすけをきたれば。かたきとなるこそやすからね。上せ立てはかなふましいぞ。道にておつつめうてやとて。くつきやうの兵者を七十余人さしつかはず。かゝりける処に。小嶋の五郎すゝみ出て申けるは。是はよからぬ御誼かな。討手は国にかくれ有ましい。理かなければこそうつたれとて。本領をは召るへし。所詮むかしにまに至るまで。

神仏に申事の。たちまち叶ふならひ(8ウ)

の候らへは。鹿嶋へ使者をたて。神主をめしよせて。調伏の法をおこなはせて御覽ぜよと申す。おやま実もと思ひ。かしまへ使者をたて。神主いそぎしやうじよせ。いつよりもきらめいて忠を尽してもてなしけり。しゆも三ごんと見えし時。しやきん百両。よき馬に鞍をいてひつたてたり。神主悦喜の色見えて。そゝろきいさむ風情あり。今ほとこゝろやすくして。あたりの人をとをのけ。信田を調伏すべきよしを一円に頼む。神主きげんかはつて。あら(9オ)

思ひもよらぬ御誼かな。我等はかしまの社人とし。天長地久。御願円満息災延命と。いのるより外は別にじゆつはさふらはす。殊更人を調伏すべき事は。中々。明のちけんもおそろしう候。さんへき程の高僧へ。仰付られ候らへとたつてにけんとする。お山このよし見るよりも。ゐたる所をづんどたち。袂をとつてひつとゝめ。扱は御へんはてきはうと一所の人や一期ふちんの身の大事を。ありのまゝにかたらせて。たのまるましきとは何事そ。ちから(9ウ)及はず御身をは。えこそはかへすまじけれと。すでにうたんとしけれ

は「ツメ」せんほうつきて神主はあふ早ことうけをそしたりける。俄の事にて有間吉日えらむまてもなし。一所をきよめ。だんをたてゝほぞんのあんじをしたりけり。調伏のだんの次第は。おそろしくぞ見えたりける。四面のだんをかざつて。ほうひやうにぼけの花。にうもくに山うつき。しやすいの水にはいもりの血ぐぐにはひつちの飯をもつてせうかうづかう牛の骨。けまんにあせほの花を(10オ)

もり。あかには白蛇の水をたれ。すでにとうみやうには。ほそきのあぶらをたてにけり。をんじき日々にかはつて。初一日のほぞん。地藏さつた南むき。二日は観音西むき。三日はせいし。東むき。四日は阿弥陀北むき。五日はくだりがうざんぜ。六日はすでに金剛夜叉。第七日にあたる日は。中尊不動明王をせめにせめてそいのりける。去共道理なきにより。其しるし見えされは。行者面目失ひて。二七日そかぢしける。是にもしるし見えされは(10ウ)

。いやおんころくせんたるしやな。まかるしやなんとぞせめにける。じゆずの緒つかれきれければ。ごゝをもつて膝をたゝきさんこをもつて。胸をたゝきとつこをもつて首をうち。いたゝきを打破り。ちやうじやうより。あへけるちは。不動の利劔に押ぬつて。是は調伏人の身の血なりと勸念して天地をうこかしせめければ。余りにつよくせめられて。ごだい尊はしんどうしてがうさんぜは。とつこをふる。こんがうやしやはほこをつかふ。大いとくのり牛が。角を(11オ)ふつてほゑたりけり。中尊不動の劔のさきになまちか付て見えしかは。一方は成就したりとてだんを破て出たりけり。「コトハ」あらいたは

しや信田殿。これをは夢にもしろしめさず。母みだひの御供を申。明ぬ暮ぬと上らせ給ふ。日教やうくかさなり。尾張の国に聞えたる。

黒田の宿に着せ給ふ。てうぶくかぎり有により。信田殿にはおはずして。「サンクトキ」母御台におい給ふ事のいたはしさよ。去共のぼらで叶はぬ道。なやみながらも上らせ給ふ。近江の国に(11ウ)

聞えたるばんばの宿につかせ給ふ。次第日々にとろへ。今は行歩もかなはねは。四五日も逗留し給へり。しだとのをはしめ申。十一人の人々も。あとや枕に立よりて。いかはせんと歎け共。終には叶はぬ生死のみち。「フシ同」あしたの露と。消給ふ哀と云もあまりあり。

信田との御歎。たとへを取にためしなし。誰とても。むじやうはのがれかたけれど。かゝる哀は稀なるへし。さて有へきにてあらされは。無縁の人をかたらひて煙となすぞ哀なる。十一人の人々は。ひとつ心に申す(12オ)

やう。信田殿の御果報は。爰までなりと覚えたり。いつ迄付そひ奉り。京よ田舎と辛苦せん。またよの人を頼まばこそ。弓矢の疵ともなるへけれ。是を菩提の智識とし世をのかれんと思ふとて。忍ひくにもとひきり。まどろみ給へる信田殿の。枕かみにとりをゐて。暇乞をも申たけれ共こそはしたはせ給ふへき。忍ひねないて出て行。さすが多年の御なじみ。頼みし君にてましますは。名ごりのおしさはかぎりなし。され共思ひ。きりつゝわかれく(12ウ)

になりにけり。「コトハ」天明ければ信田殿。御目をさまさせ給ひて。たれかあるなげきても叶ふへき道か。いそく旅にはあらずや。いそげ

く仰けれともお返事申ものもなし。こはいかにとおほしめし。かつはと起させ給ひて。あたりを御らん有ければ。あらなにもなや。十一人の人々の。たふさ計ぞ残りける。「クトキ」しだ殿このよし御らんじて。なさけなもの共や。とても浮よをいとほなどもろともにつれゆかで。としにもたらぬわれ一人を捨てはいつくへ行けるぞと。くとき歎(13オ)

給へとも。其しるしもまします。「コトハ」腹をきらんとし給ふ所へ。宿の亭主参り。ことのしさひをうかひ申すに。初をはりの事共を。くわしく語給ふ。ていしゆ承り。やあかほと道理を持たから。

なとやみやこへおのほりあつて。「サンクトキ」御沙汰なきぞと申せ共。供ひとりもあらはこそうき世に有てせんもなし。ふしぎに尋る者あらは。かくなりつるとかたれとて。「フシ同」念仏申刀をぬきすでに自害と見え給ふ。ていしゆ余りのいたはしさに。御刀にすがりつき。都までの(13ウ)

お供をは。此男か申へし自害をとよめ給へとよ命をまたふもつ亀は蓬葉にあふとつたへたりつらき人のはてをも。いきてそ見はて給ふへきし。てはなにの曲あるへきと。とよめ申たりければ。御自害はとまりけり。明れはていしゆ。お供して都へとてぞのぼりける。五条に宿をとりにてをき。さたのほうをは申しをへていしゆはいとま。給はりてばんばの宿に下りけり。「サシ」信田殿た一人都にとまり給へと(14オ)

「フシ同」やるかたもなきことくにて。都に日をはをくれ共。沙汰するむねもまします。田舎のえんをつたへねは。長在京も。叶はずし便もなふておはします。「コトハ」しだ殿心におほしめす。かなはぬ事を案ずるはかへつてぐちの至りなり。我等常陸の国に下り。あねごを頼みゐるならば。成仁の後。びん隙をうかどひ。お山を一刀うらみん事。なんのしさいの有へきと。おほし召れる間。めづらしからぬひたちへは。又こそ下り給ひけれ。かぎりあらば我こそ。人をもふちすべけれ共。とき世にしたがふ(14ウ)

ならひとて。あね聲殿をたのみ。かどのほとりにたゝずんで。物申さんと有しかは。人を出してたそととふ。くるしうも候らはす信田にて候。万事は頼奉る。かうさんせんと有しかは。お山此よし聞よりも。あふ尤かうこそ有へけれ。是へと申たけれ共。所存の内を察し申たり。びんひまをうかどひて。一刀うらみんため。きたり給へる心の内は。鏡にかけて覚たり。おさへて討たけれ共。かうにんのほうなればたすけ申。とをき国の知らぬさとへ。とつく落行給へ。片時も国にましかへて。われ(15オ)

ぼしうらみ給ふなど。「サシイロ」遙々下るしるしもなく。もんより内へ入さるはいと無念ぞまさりける。「クトキ」あらいたはしやしだ殿。たま〜ちかくめぐり来て。父のみばかを今ならては。いつの世にかは拜むへきと。御墓に参り給ひ草木の花をつみ手向。かほとに果報つたなき身を。ひとつ蓮の台に。むかへとらせたまはで。うき世に残し給ふ事よと。くどきなけきたまへと。「フシ同」亡霊なれば。

どくつより御こゑ出る事もなし。さく〜としたる風の音。松に吟ずる計なり。ばう〜と(15ウ)

したる草の露にすそも袂も打しほれつきせぬものは涙なり。「コトハ」かくて信田殿。みはかを下向有所に。太刀わきばさんたる男の。あみ笠ふか〜とひつこうだるがあやしきさまに参りあふ。誰成らんと御らんずるに。是は別て年久しき浮嶋大夫なりけり。兼ては知らざる住吉の。まつとしなれば悦びを。引合ぬるさいはひとて。ぐして御供申かうちにかへり。五人の子共をちかづけ。是〜拜み申せ。この程汝等か。余りに恋奉りしに。諸天のめくみのあるに(16オ)

より。不慮に参逢事は。一眼の亀のたまさかに浮木にあへるごとし。定て十日計には。つゝむとひろう有へし。此山里と申は。昔よりのよきじやうくわく。いかに責るともたやすくおつへしとも覚えず。汝等に軍をさせ。時々見てめさまいて。年をくりあんずる程に。都へ此事もれ聞え。国の乱れは何事そと。うへの使立ならば。とりつゞきおつそをたて。よろこびのさたをきはむへし。今こそいしのせいなりとも。終には国を治むへしやあ俄にあはて〜は何かせん。谷々嶺々(16ウ)

尾つゝき共を。人夫をそろへてほりきらせよ。はしりどうづき石弓。爰かしこの。つまり〜にはりかけさせよ。かどりをたかせよかいだてをかき。打とけるなる。げぢすれば。「サシイロ」子共もな〜めによろこぶで。とてもきゆへき露の身を。君ゆへしなんうれしやと。よろこひいさむぞたのもしき。「コトハ」つゝむとすれと此事。お山の

太郎つたへきよ。さては先祖の郎等に。うきしまか頼まれけるか。はう／＼引あひつゝのりては。ことの大事たるへし。いまた力のなきさきにはやよせよと申す。承ると申して(17オ)

。お山がじつし。よこすか太将にて。愛をせんどゝたゝかひけれども。大勢うたせひつかへす。かくてはいかゝあるへきとて。お山の舎弟。行光太将にて。三千余騎をそつし。一のきどまで責入れれど。是も。大勢討せひつかへす。さては自身むかはでは叶ふへからすと。お山の向はれける間。常陸下総兩國に。残る兵者は一人もなし。城にも愛をせんどゝ戦けれ共。実はよせては。国かひとつになつて。谷をも峯をも。平地に道を作らせ。「サシ」あら手を入かへ責ければさのみはいかでこ(17ウ)

らうべきぞや。二三のきどを打破れつめのじやうにぞ。籠りける「コトハ」浮輪申けるやうは。それ人の。命をたばう合戦はことによるそ。世にある人を主に持申。末を頼むときにこそ。いのちもおしく思はるれ。いつ迄いきてなんどき。世に出へしと覚えず。子共はなきか討死をせよ。心やすく太夫も。腹きらんと云まゝに。例の弓とり出し。はりがへあまたもたせ。矢びつ三がうかゝせ。大手の矢倉にあかり。いかにや女房こなたへきて。さまひいてたべ。軍してみせんとありし時に。女房(18オ)

生年五十六。かすはなるかみをからはにあげ。うすぎぬかづき矢倉にあがり。何とて子共か軍は。こだれて今迄をそいぞと。「ツメ同」しきりに力を付られてはやうき嶋太郎かけ出る。其日を最後と思へは。

龍を縫たる直垂に。鬼かたすつたるさうのこて。びやくだんみがきのすねあて。くまのかわのみみたひ。白かねにてへりかね渡しあくち高にふんごうたり。獅子に牡丹のわいだてし。いと火おとしのよろひの。みの時とかゝやくを。草摺長にざつ(18ウ)

くとき。ゆつてうわ帯ちやうとしめ。九寸五分の鎧とをしをめてのわきにさいたりけり。一尺八寸の打刀を。十文字にさすまゝに。三尺八寸候らひし赤銅作りの太刀はいて。四十二さいたるたかうすべうを。はず高にとつて付同し毛の五枚甲に。しゝがたりつていくびにき白綾の母衣をさつとかけぬりこめの弓のよつたりばり。しめのせきづるかけさせまん中にぎりよこたへて。三のべだちのしらあし毛。七寸八分あけ六歳に金覆輪の鞍置せ。ゆんづへに(19オ)

すがりゆらりとりの。ほりのはぶたに駒をすゆる兄弟五人のもの共。思ひ／＼の具足を着。心々の馬にのり。たかひに手綱をとりちかひかけうかけじとしたりしを。かたきみかた是をみてあつはれ武者のいきおいかたとほめぬ人こそ。なかりけれ「コトハ」父の太夫矢倉のうへにてつく／＼見て。あれ／＼女房御らんせよ。いづれも器量はおとらぬよなふ。「サシイロ」あつたら子共をよにあらせて。所領の主ともなさずして。只今ころさんおしさよな「コトハ」はやしね子共(19ウ)

「タトキ」さは有なから今をかきりの事なれば。ま一度こなたへ顔見せよたれも。「フシ同」名残はおしいそと。さしにも剛なる。太夫殿はら／＼とぞなきにける。「ツメ」女房これをき。から／＼と打わ

らひ。老にほれたか太夫殿。わかれた今のなき事かな。ないても叶ふへき道かや。いかにや子共。軍はさすか大事のもの。心の剛成計にて。兵法知らて叶はず。みかたぶせいで有なから。かたきの陣へかゝるには。すきのさき。とがりやかたぎよりんくわくよくりやうぢんなり。ぎよりんとへいへる。かけ足は。魚のいろこをまなべり。くわく(20オ)

よくといへるは。鶴の羽がひを表したり。駒の手綱をしらいては。かたきかむぐうにきられぬぞ。むかふ敵ざる時は。けあげの鞭をちやうとうつておもてかへしの手綱をすくひ拝み切にきり捨よ。弓手へまはるかたきをは。すみの手綱きつと引さうかうの鞭をうつてきれ。馬手へまはるかたきをは。太刀のつかを返して。さわらのぶちをうつてきれ。祖父も祖母も是にてみるぞさじきのまへのはれ軍ぞ。ふかくをかくなや子共とて。おかしき事はなけれ共。子共に力を付ん為。さまの(20ウ)

板を打たゝきからくゝとそわらひける。いとゝはやりた子共か。父にも母にもいさめられ。おこゑをだいてかけ出る。まへの河原は足びき。ならひつたへし手綱の秘事。をしへをかれし鞭の曲。むぐうに馬を乗りかけてはさつと引て見れば前の河原の石よりも。おほきは死人なりけり。とつて返しさつとはかけ。五六度までたゝかうたり。女房御覽して。子共か軍の面白きに。うしろつめしてとらせんとて。かつきたきぬをさつとをろせは下は武者にてたつたり。紅の袴のしたに。ひぎ(21オ)

よろひにすねあてし青黄匂ひの鎧き。たけなる髪をからわにあげ。太夫か好みしつげのぼうを。しはしかせとて打かたげ。大手のきどをひらかせ。堀のはゞたに駒をすゑ。大音揚て名乗やう。いかにや。小山の人々。我をはたれと思ふぞ。陽成院より三代。つものらくわうに五代なり。渡辺たうに太將軍。みだの源次か娘に。みたやしやによとは自なり。歳は生年五十六。二つとなき命をは。信田の御りやうに奉るぞ。我とおもはん人々。かけよ手なみ見せんと。甲をとつてうちきつゝ(21ウ)

すでにかけんとしてたりけり。「コトハ」浮嶋太夫矢倉の上にてつくゝと見て。あふ子共か剛成道理。母か心か剛なれば。かほとに剛なるもの共か。しんし兄弟夫婦となづけて。寄相けるこそふしきなれ。されは此君の祖父まさかど。平親王とあをかれ。天下をなひけ給ひしも。我等が父の此ことく。よかりし故とおぼうるなり。いかにやごれうお出あつて。女軍を御覽せよ。ためし稀なる事なりとて。信田殿を矢倉へしやうじ申し。委見奉り。「サシクトキ」まさかどの御眼に人見か二つましゝて。坂東八ヶ国の(22オ)

わうとならせ給ひしか。君にも弓手の御眼に。人見が二つましませは。王位までこそおはせずとも。必坂東八ヶ国の主とはならせ給ふへし。従我等討死仕るとも。君は命をまどふして。廿五までお待候らへ。必廿五にて。御世に立せ給ふへし。「フシ同」我等も。それか思はれて。子共か命もおしけれと。当座のはぢを。かゝじたため皆討死を仕る。祖父と祖母と討死せは。御身は敵に生捕れて。お山か館に。年を経て悦

びの御世を。待給へ。「コトハ」暇申て我か君とて。矢倉をゆらりと
とん(22ウ)

でおり。よま所へつつと入。一枚まぜの大あらめ。そでをはといてが
らと捨。胴計ゆりかけたり。其日最後の打物に。とうちがうつたる長
刀の。四尺八寸有けるか。糸をは三尺五寸にこしらへひたゑにかねを
のべ付たり。まちつと此柄なかうして。かざやおとらんと。二尺計さ
しきげ。ふつつとねちきりなげ捨。手ころにまはひてふつて見て。あ
つはれかねやと打うなづき。南無三宝あぢぎなや。いかほともの者共か
きられて妻子に物をおもはせんなふ女房とかたる。夫婦ともに駒の手
綱かいくつ(23オ)

て。かたきの陣へかけて入。「ツメ」面を合する者はなし。ばうをつ
かふ兵法に。芝なぎ石づき払ひうち。木の葉返しの水車。馬人きらは
ず打ふする。長刀つかふ兵法に。波のこし切稻妻きり。車返しやるか
たな。女房打通れは太夫あとよりきりめぐるさきに子共かくれは父母
跡よりかけにけり。物に能々たとふれは。天竺の戦に。歩兵か先に
かくれば。わうぎやう角行かけ合する。金銀桂馬かゝる時。太子も懸
り給ひけり。此戦の兵法を。将基の盤に作れるも(23ウ)

あふ是にはいかてまさるへき。うき嶋太夫か長刀を。こらへす三に打
おれは。大手をひろげかけ合。ねぢくびつゝぬき人つむて。唐竹わり
にひつさいたり。昨日けふとは思へとも。二年三月の合戦なり。此戦
は夜日七日。うたるゝものは数知らす子共も五人と申せ共。爰やかし
こにおしへたて独りも残らず討れたり。太夫ふうふ計なり。さのみに

罪をつくつては。未来の業と成へきなり。かちもせさらぬもの故いざ
祖母ごぜと申て。たかひに刀をぬきもつて。さしちかへしんたりしを。
おし(24オ)

まぬものはなかりけり。「コトハ」去間信田殿。うき嶋かゆいごんは。
さる事なれ共。夫婦討死をする上。何にいのちをたばうへきと。自害
をせんとし給ふ所へ。お山か郎等参り。まさなき御じがひ候かな。こ
なたへ御出候らへとて。生捕申て出る。小山此よし見るよりも。され
は人の果報の有時は。唯何事をも心に任せけるそや。猶々たすけ置な
らは。末の世とても煩たり。去なから白昼に。首をはねん事共は。天
下の聞えも然るへからず。夕さりの夜半に。うち海にしつめよとて。
相馬(24ウ)

重代の家人。千原太夫に仰付る。かのち原と申すは。相馬殿の御内に。
年比召つかはれしものなれ共。時世に随ふ習ひとて。お山殿につかへ
申。信田殿預り奉り。大事の囚人はなり。若もうしないや申さんと。
いましめたりし其上を。重てつよくいましめ。「サンクトキ」おくふ
かにおしこめ申更行夜半を待たりしは。ひつぢのあゆみの近付も。か
くやと思ひしられたり。「クトキ」あねこ此由聞し召し。むさんや
〈な〉信田は今をかきりにて有けるぞや。浅ましや自おつとの心とひ
とつにし。かくなすよ(25オ)

とやおほすらんに。最後を一目見んとて人しつまりて夜半に。千原か
方へ御出あり。信田殿に付たりし数々の縄を御覧して。あらうらめし
の事共や。自にも付ずしてなと信田殿計につけゝるそや。何とて物を

は仰なきぞ。恨の心にてましますか。「フシ同」日の本に。あらゆる神もしろしめせ。うしろくらき事はなしと。かきくときの給へは。信田殿聞し召れて。うらむる所存は。なけれ共涙にくれてことばなし。とても我か身は果報なく。今をかきりの事(26ウ)

なれば。かやうにあくかれ出給ひ。お山か方へもれ聞え。重てうきめを見給ふな。お婦りあれと。ありしかは。あねご此由聞しめし。たとひお山にもれ聞え。おなじ測にしつむとも恨とは更に思ふまし。かやうにならせ給ふ事。たゞ是ゆへの事なれば。うき物もちて参りたり。御覽せよと仰あり。袂よりもまき物を。取出してたびにけり。信田殿ひらいて。見給ふに本領のぢけんまるかし。是は家につたはるへき。重宝にてさふらへは。持ては何のえき哉らん取ておかへり(26オ)

まませせや。あねご此よし聞しめし。それはさる事なれ共。縦御身死たりとも。えんまのちやうの出仕の時。くしやうじんの。御前にてさゝけ給ふ物ならば。道理かぎりあるにより。なと一向のつみ科の。うかみのがれで有べきぞ。唯持給へと有し時とりてぞもたせ給ひける。さてしあらぬうき身にて。名残の袂。引さげてあねごはかへり給ひけり。「コトハ」すでに其夜も更ければ。小山より使たち。信田をはしつめて有けるか。とくしつめよと有しかは。千原力なふして。小船一(26ウ)

親としらへ。信田殿をのせ申。沖をさして漕出。こゝにてやしづめん。かしこにてやしづめんと。さすかにしづめかねつ。うかれてしはしたゞよへり。「サシクトキ」あらあちきなや世の中に。すましきもの

は宮つかひ。我奉公の身ならずは。かゝるうき目によもあはじ。昔は相馬につかへ申此君を。主君とあをきし其時は。「フシ同」月とも日とも思はずや。さんがくよりも高きおん。しらんよりもかうばしく。つきそひまはり申せしか。いつぞの程に引かへて。うつればかはる身のうさは。わが手にかけてしづめなば(27オ)

。草の陰にて。相馬殿さこそにくしと覚すへき。「片ツメ」縦此事聞えて。あすは測にしづむとも。一旦此君を。おとさはやと思ひて。たゞ今こそ御最後よ。念仏とすゝむれば。手を合たからかにかうしやうに念仏と申さるゝちはらもともに申。腰の刀をひんぬいて。繩さんさんに切てすてしづめの石計をは。たんぶと打いれ南無三宝今か見はてとたからかにいひしづめたていにもてなし。たすけてくがにもとりけり。是や始皇の御時。えんたんか古郷にかへりしも。かくやと思ひ知られ(27ウ)

たり。「コトハ」明ては人目しげしとて。よのまに送り奉り。眺かけて千原は。我か宿へこそはかへりけれ。天明ければ。お山より使たつ。千原御前に畏る。おやま殿御らんして。汝は。信田をはしづめて有けるか。中々お尋までも候らはすしづめ申て候。それ程しつめける者か。など其時のけん見をは。こはぬぞ。頼て心得たり。汝は相馬せんぞのけにん。如何様心かはりをして。おとしぬると覚ふるなり。たゞとはんにはよもおおじ。あれがうもんしてとへ。承ると申て。あらけなきものゝふ共か。一度に座しきを(28オ)

はらりとたつて。むさんやちはらを。とつてふせちうにあげ。七十四

度のがうもんは、めもあてられぬ次第也〔サシクトキ〕五体しんぶんきれそんじ。余りくつうのあるときは。しや落はやと思ひしか。まてしはし我か心〔フシ同〕ちはらはいる日のことくなり。信田殿をたどふれば。出る日つぼむ花なれや。余命をゆふとも。かきりあり。かはれや命とて。いかにとへとも落ざりけり。水火の責をあててとう。是にもさらにおちされは。枯木よりも繩をさげ。あぐる時には。息たえてをろせば。少よみがへる(28ウ)

。七日七夜は隙もなく。あらてを入かへ責ければ。さのみはいかて。こらふへき朝の露と消にけり〔コトハ〕お山大きにかつて。妻子はなきか召出して。重てとゑ。承ると申て。二人の若母もろともにひつすゆる。お山殿御覽して。おつとがひし事を。知らぬ所はよもあらし。ありのまゝに申せ。いつはるけしきの有ならば。頼ておつとがごとくなすへしと。大きにいかり給へは。女房ちつともうれいたるけしきはなくて。たとへはみぢになされ申とも。知らぬ事をは申ましい。ありしよの暁。たゝ今しづめ申に行とて(29オ)

。小船一艘こしらへ。信田殿をのせ申。沖を指てこぎ出る。自余り物うさに。急はまに下り。ことの躰を聞さふらふに。しだ殿の御こゑにて。高声念仏し給へは。千原もともに申し。たんぶと物のなつてより。其後は音もせず〔クトキ〕とてもかやうに失なはれ申命を。などや信田殿の御命にかはり申て。ひとまつおとし申さぬ。そや〔コトハ〕是を偽りとおほしめさは。あたりの浦人を召集て御尋あれと申。さらはめせとて。あまたをめしてたつねられけるに。其夜の沖のてい

(29ウ)

たらく。何事ありとは存ぜねど。みな此ていとことふる。さてはしつめて有ける物を。ふびんに千原をといけりとて。妻子を返し給ふ。去間した殿。猶も都の恋しさに。明ぬ暮ぬと上らせ給ふ。日数漸々重なり。近江の国に聞えたる。大津の浦につかせ給ふ。かとなみこそ多きに。運のきはめのかなしさは。人をかどへてうる。ずしの藤太かせうけに。宿かりそめにおとまりある。藤太は信田殿をかどへてうらんだめ。夜もすからこしらへたり。おとしも未にやくに御座有人の。いくよりいつかたへ御通へり(30オ)

有そと申せば。信田殿聞し召れて。是は坂東かたよりも都へ上るものにて候。藤太承り。えゝほこりのおあるきのいたはしさよ。都までのお供をは。この男か申さんとて。やせたる馬に鞍ををき。わか身もともにもぞ出立ける。信田殿心におほしめす。さきの上りには。万場の宿よりも送られけるか。されは都ほとりは。人の心ざしのふかよりけりと。あすのなげきを知らずして。をくられ京へのほらせ給ふ。不案内の御事なれば。やかて御宿をもひけい申さんとて。五条に(30ウ)

行てばくらうざの。人あき人のそうりやう。わう三郎に云かたり。駒一疋にかへとつて。藤太は国に下る。わう三郎が本よりも。鳥羽の舟戸へうる。それよりも津の国の。堺のはまへぞうつたりける。四国西国を売まはる。信田との心におほしめす。けうがるものに行相て。しらぬ国々。浦々をも見つかるとおほしめし。後には北陸道のなだをうられさせ給ふ。若狭のおばま。越前の鶴賀。みくにのみなど。加

賀の国にきこえたる宮のこしへそ売にける 「サシイロ」物の哀は多
けれ共。みやのこしにて(31オ)

とゝめたり 「コトハ」折節春の事成に。しづがしわさををしへて。
田をうてと責ければ 「サシクトキ」くわといへるものもち。小田
の原へは 「フシ同」出給へと。うつへきやうはましまさすかの三
わうのいにしへは。神農皇帝忝。自すきをになひ。そのいつけいの田
をかへし。ごこくの種を蒔しかは。しんのうかんのう。めてたくし尺
のほだけも長かりき。それはけんわうせいしゆにて。国をはごくむ道
理あり。かの信田殿ののうげうは。泪の種を蒔やらん。のにも山にも
立田姫さほのはやしに。ひれふして(31ウ)

なくより外の事はなし 「片ツメ」是を見る人々か。徒ものと申て。
となりの里隣国に。かはんといへるものはなし。もてあつかうてした
殿を。追出し奉る 「カ、ルフシ」あはれとよ所にしら雲の。立出ぬ
れは。あまのはら。身は半天になるかみのとゞろく／＼とあゆめ共。と
まり定めぬうかれとり。鳴音に人のをとろき。あけぬるかどを過のし
た道あるかたにまよひゆき。身はうへ人となるまゝ。たもとにものを
乞食。草葉にかゝる命をは。露の宿にやをきぬらん。さたむるかたの
なきまゝ。足に(32オ)

まかせて行程に。能登の国に聞えたる。おやのみなとにつかれけり
「コトハ」折節おやのみなとへは。よとうかよせきたるへしとて。
門々かどをきりふさぎ。ようじんきひしかりけり。かゝるとしろしめ
されねは。もん／＼かどにたゞずんて。よになしものゝうかれたるに。

じひましませと有しかは。内よりも尉一人立出。信田殿をみ参らせ。
あらをそろしや。このほと待たりし。盗人のけごみこそきたつたれ。
あれよつて打ころせ。若もの共と下知をする。折ふし有あふ若もの
も(32ウ)

が。ろかひのおれ。やすのゑをひつさげ／＼。さやうなるしれものは。
いつくの程に候と。しだ殿を見つけ申先一つゑつゝそうつたりける。
たゆふかさねて申けるは。やあ一杖つゝはあそびごとか。あれていの
ものをいけてをあて。ものをゆはすれば。のちに人かそんじさふぞ。
たゝひたうち打ころせ。わかもの共と下知をする。いとゝはやりた
るわかもの共か。いたはしや打ふせ申。たすかりかたく見え給ふ。か
の浦のとねの女房は。なさけありけるものにて。いたはしやこの人は
(33オ)

。よにすてらるゝ人の子の。親の行ゑをたつねかね。かゝるえんごく
はとふまで。来たりたるとおほふるなり。まつひらわれに。たべとこ
うたりけり。わかきもの共承り。つゑを捨てそのきにける 「」か
くて信田殿をわか宿所にしやうじ申。よきにいたはりたてまつる。い
にしへほとはなけれども。かたちもすこしなをらせ給ふ。はるかおく
むつの国。そとはまに。しはあきんどのありけるが。とし／＼しほ
をあきない。かのうらへ舟をのる。といはとねのもとなれば。しだ殿
(33ウ)

を見まいらせ。これなるわつはを。われにたへといふまゝに。おさへ
てしほにかへとり。舟にとつて打のせ申。十八日と申すにはそとの

まにぞあかりける。此あき人は。なまけもさらになきものにて。一兩日も過ぎるに。此あたりにすむものは。しほをやかては身は過ぬそ。しほやき給へまれ人と。しほ木をこらせしほかまの。火をたかするこそ。ものうけれ 「フシ同」いと、塩たれころもきて。したもえくゆるかまの火をたくこそはものうかりけれ。つらきなかにもなく(34オ)

さむは。しほやのけぶり一むすひ。末はかすみにきえにほひて。行ゑのほともしらなみの。よるく袖をしほらして。常陸の国の。恋しさはいと、日にこそまさりける 「コトハ」秋もなかはの事なるに。かのうらのりやうじしほのしやうじといつし人。はま出してよもすから。月をなかめてあそはれしか。信田とのを御らんして。こゝにしほ焼わつはの。目のうちのかしこさよ。しいれなんどのじんじやうさよ。いかさまにも太夫は。よにある人をかどへて。きたりたると覚ふるなり(34ウ)

。我か子にせんととの給ひて。おさへてばうてとりちやくぞんとかうし。かくて元服をさせ申。塩路の小太郎殿と申て。あらめてたや。かみからしもに至るまで。かつがうせぬはなかりけり。かゝりしときの折節。こくし国にくだりたまひ。たかの郷につきたまふ。さいちやう御家人はせあつまり。ひばんたうばんをつとむる。こくしよりし御誕には。われひたちの国にありし時。相馬とないきがちんしにより。両はうたえて年久し。それも座しきのろん。さかづき(35オ)

のけんはい。さためなかりしによつて。せんなき事も有しそかし。こ

くし在国の間に。座しきのやうをさためんと。ひだりはかつたの太夫。右は柴田のしやうじ。惣してざしき十三ながれ。人数かれこれ三百余人。くもりたるものを付されは。はれがましきはかぎりなし。其中にしほ路のしやうじ。我か身は老躰なりければ。やうしのちやくぞん信田殿を出し申す。ならびのさいちやう是を見て。かなふましいとさうる。こくしよりの御誕には。何とてしほ路(35ウ)

自身まいらぬそ。かみをかるくするゆへか。其儀にてあるならば。塩路か本領ことくく。めしあぐへしとの御ぢやうなり。しだどのきこしめされて。名のらはやとおほしめすか。いやく。国ひろきところにて。おやまか内ゑん一ぞくの。ありもやせんとおほしめし。名のりかねてましますか。いやく。たゝ今名のらずは。養父の父母のはぢといひ。座しきをたたん無念なり。名のらはやとおほしめし。系図をとりに出しこくしのまへに 「ツメ」さゝけらるゝ。こくし此由(36オ)御らんして。なにく。かつらわらの親王よりも。六代のこうゑん。

まさかどの御孫相馬の実子信田の小太郎なにがしと。うちふみけんしよなるあいだ。五十四郡か其内には。是にましたるぞくしやうなしとこくしの対座ゆるされ申しなをり給ふぞめてたき。すでに御さかもり。七日と聞えけり。さいちやう御けにん。いとまを申てやかたくにかへらるゝ。其中にしだ殿もいとまをこうてかへらるゝ。こくし御らんじ。あふいたはし。奥州のこくしを(36ウ)

。三とせか間たてまつる。其まゝこくしは。みやこへのほつてあんどを申て。まいらせんとて。こくしみやこへのぼらるゝ。さるほとに信

田との。きのふまではしほをやき。うき身をこがしたまひしか。けふはいつしか引かへて五拾四ぐんの主となり。國をたいらげたまふなり。「コトハ」さるあいたひたちの國に候らひし。おやまの(太郎)行重。榮花さかへてきはもなし。比は七月七日とて。上下万民おしなべて。たからものをそろへて。七夕にかすならひ。お山殿も金銀れうら。教の宝(37オ)

をそろへて。七夕にかざられける中に。信田玉作りのぢけんまきものを。いかにたつぬれともなし。是はいかさま。よの人しるへからず。御身のぬすみとつて。他のたからとなしたるとおほふるなり。かゝるうしろくらき人を。たのみて何のあきやらんと。いたはしやひめきみを。追出し申す。「サシクトキ」あらいたはしや姫君もとよりも。かく有へしと期したれば。めのと計を引ぐして。お山かたちを出させ給ふ。あさましやみつからたれをたのみて今さら。いつくへとてかまよふへ(37ウ)

き。信田殿か身をいれし。うち海にしづまんとて。はまぢへ下らせ給ひけり。「コトハ」ちはらがごけい参りて申す。なふいたふなげきさふらひそ。おつとの千原が。しだどのの御いのちにはかはり申てさふらふそや。かずくの文ともを。とよめをかせたまへとも。まいらせ上る事もなし。これく御らんじさふらへとて。有しむかしの御ふみをおねごの御手に参らせ上る。「サシクトキ」あねご此よしを御覽して。あらうれしや信田殿はいまたうき世にありけるぞや。かなはぬまでも(38オ)

さたの為。みやこへのほりつらめ。いさやめのと是よりも。みやこへのほりたつねん。さりなからさりなからかくて都へのほるならば。よしなきあだなや立なんと。あたりになつときたつとき寺により。たけとひとしき御ぐしを。そりおとし給ひけり。めのともやかて。おなしすかたにさまをかへ。「フシ岡」こきすみ染に。身をやつし。みやこへのほり給ひけり。名所旧跡をながめこえさせ給ひつゝ。三十五日と申に。都に付せ給ひけり。にしひかしの京を。たつぬれとその(38ウ)

ゆきがたもなかりけり。くまのゝたうをたつねんと。南海道にさしかり。天王子住よし。ねころこかわを打過て。熊野にまいりてみつの山。こゝろしつかに。ふしおかみたつね給へと行かたなし。四国九國をたつねんと。だうしや舟に。びんせんこうて四國にわたりて淡路しまも。こゝろしつかにたつねけり。筑紫くだりの道すから長門の國府にあかまかせき。あしやの山崎はかたの津しかのしままで。たつぬれとその。行かたもなかりけり。なごやを出て瀬(39オ)

戸をゆく。ひらどの大しま。松浦みろじしつの里。くわんきこだうしまいわうかしまもちかくなる。ゆきのもとおりとをるにそ。きゆる計のわがこゝろ。日向の國にとさのしま。きのふさとにあわしま。豊後ぶぜんをさし過て。備後の國に聞えたる。おどりだうの山をこえ。こいはしうしのみつし。あそのだけをこえ過て筑前の國にいぎの里。あごくはとふにいたるまで。名所はつきぬものなり信田の小太郎。なにかしとへとことふるものはなし。「コトハ」つくしのうち(39

ウ)

にもくもりなし。いさやめのと是よりも。みやこへのほりたつねんと。周防の国にさしかかり。おうちのこほりあさくらや。こくらくいぢと大きくからに。立とままりてそたつねける。「サシイロ」はりまの国に入ぬれば。あか松かわらよいのしゆく。高田のわたり矢野のやと「コトハ」名所きうせきをなかめこえさせ給ひ。さかひの松に出させたまふ。「サシイロ」左右田の森からすぎぎ。人まつか岡をたつぬるに。その行かたもなかりけり。「カ、ルモンタイ」須磨のうらはすの池ときくからに。おなしはち(40オ)

すにのらばやな。兵庫につけはみなと川。雀の松原打出のしゆく。／＼こんやのいたみ手しまのやと。太田のまちやあく田川。／＼かうない山さききつね川。舟にのらねど。／＼こがなはて。「フシ同」月をやとるかかつら川。うき世はくるまの。輪のことくめぐりきぬれば九重の。こゝのへの花の。みやこに。つき給ふ。「コトハ」九ぢうの内にくもりなし。いさやめのと是よりも。もとの道にさしかゝりくだらんとの給ひて。「サシクトキ」我をはたれかまつ坂や。あふさかのせきの清水(40ウ)

に影見えて。今や引らん望月の駒の足音きゝなるゝ。大津打出のはまよりも志賀唐崎を見わたして。かたゝの沖に引あみのめごとにもろぎ。なみたかな。瀬田のから橋はる／＼と。尋る人のおもかけをうつしもやせんかゝ山。えちの川せのなみちりて。すそは露袖はなみたの隙よりも。すりはり山をこえゆけは。あれて中々やさしきはふわのせき

やのいたまもる。月見たるゐの宿過て。うへしきなへのくら田こそ秋はなるみとうち(41オ)

なかめ。「フシ同」三河の国の八はしくもてにものや思ふらん。ふじをいつくと遠江恋をするかのみのゆくゑ。待宵の月も雲間をいづの国。信田にはいつかあふしうまで。三とせ三月かその間。しだの小太郎なにかしとへと。こたふるものはなし。「コトハ」其年の文月なかばに。奥州たかのこうにつかせ給ふ。十四日うらぼんとて上下ばんみんおしなへて。じひをほとこす日也けり。したとのもちゝ母の。けうやうの御為に。辻々に札をたて。せぎやうをひかせ給ひしか。びくにたちを(41ウ)

御らんして。あれ／＼しやうじ申せとて。持仏堂にしやうじ申よきにいたはり奉る。「サシクトキ」あらいたはしや姫君よもすから御経あそはし。暁かたになりしかは。えかうのかね打ならし。御こゑ高くゑかうある。「クリ」この御経のくりきによつて一切の衆生こと／＼ぐむしやうはたひとせうすべし。「クトキ」殊にはちゝ相馬殿母御みたひ所した殿。しやうぶつとくたつなり給へ。其中に信田どのいまたうき世に有ならば。此御経の十羅せつによのくりきにより。きたうとならせ給ひ信田の。「サシ」小太郎(42オ)

に。今一度あはせたひ給へ。南無三宝／＼と。ころものそでをかほに。あてもろきは今の涙なり。した殿も父はゝの。けうやうの其為に。持仏だうに御座有て夜もすからお経をあそはせし。ゑかうのこゑを聞きめし。夢うつゝともわきまへす。相のしやうしをさつとあけ。くわし

く見奉りしに。あねごのなりゆくすかたなり。するくとはしりより。御袂にすかりつき。是こそしたの。小太郎にて候らへとて。消入やうになき給ふ。あねこも此事をうつゝとさらに(42ウ)

わきまへすきていかに小太郎か。是こそいにしへのせんじゆのひめにてさふらふそや。さていかにめつらしや。うき時はだうりかな。うれしき今の何とてか。さのみ泪のこほるらんと。むつまじけなる御有様余所の。たもともぬれぬへし「コトハ」信田殿仰けるやうは。かほとめてたきよの中に。何をさのみになけくへき。いざさせ給へあねござん。ひたちの国へ打こえ。うらめしき小山かかうべをはね。父さうまとの。御墓所にかけをき。くわいけいをすゝぎさふらん。もつともしかるへしとて(43オ)

。五十四郡かその内に。くつきやうのつわものを。三千余騎そろへらる。お山此よしつたへき。国にこらへがたうて。にげて京へぞのほりける。さる間こくしは。あんどを申たまはつて。国に下り給ふ。お山道にてまいりあふ。馬よりもとんでおり。此度の命を。まつひらたすけてたべと申。あふやすき程の事とて。たばかりよつてからめとり。京づとゝ名付て。しだ殿にたび給ふ。信田殿。なゝめに思召し。武蔵の国に。つまごへの野辺に引すゑ「片ツメ」くび打落し奉る。朝の露と消けるを(43ウ)

にくまぬものはなかりけり。頓て信田殿上落ましく。天下の御目に懸らる。帝へうら見ましく。坂東八か国を信田殿にたひ給ふ。其次而に近江の国とかや。大津の浦を申乞ずしの藤太を搦捕。十日に

十のつめをもぎ。廿日にはたちのゆびをもいでくびを。引くひにし給へり只人は情あれ情は人の為になし。終にはわか身にむくふとにくまぬものはなかりけり。ばんばの宿へ打超ましまして。春草と小太郎かもえ出て候へぞ。うれしきをもつらきをもなとかはかんぜざるへきとをじまのちやう三百町(44オ)

万場のていにたひにけり頓て御身は常陸の国へ下向あつて。しだの河内にて。討死したりし浮嶋大夫か子孫はないかとい給ふ。太夫か孫を三人召出し候らひ三千町をたびにけり。千原かごけい若もろともに参れば。なゝめならすに思しめし。坂東八か国の。惣まん所を。若共にたびにけりやかて御身は信田の郡に御所をたてて。御とし廿五にて御世に立たたまひ。ひばんたうばんつとめさせ。栄花にほこり給ひけり。あねごのびくに。大かた殿と申て。いつきかしつき給ひし。末繁昌と聞えけり(44ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(毛)毛利家本、(内)内閣文庫本、(打)打波家本、(慶)慶応大学本、(松)松村本、(藤)藤井氏本

1オ ○十三年乙の卯―(毛・内・打)十年丙辰、(慶・藤)十年きのとのう ○きんたんし―(慶)きんだんしあるときはせんをひきまたある時はきやうをかき ○聾の思ふ所もあり―(毛・内・打

・松・藤) ナシ ○しばしは返事を申さすやゝありて―(毛・打) ナシ、(内) しはして

2ウ ○御意にもれては―(内) ひとりまします母上の、(慶) あすはなにもならばなれ一人まします母上への御意に洩ては)

3ウ ○そもあのうき嶋を…世をは過ぬものか―(毛) ナシ

4オ ○まるかし―(毛・打・慶) まき物 ○あらおびたゝしや―(打) ナシ ○知行するさへ―(慶) 此あひだ知行仕るだに

6ウ ○戸板の太郎―(慶) 豊田の太郎村岡五郎岡部の弥次郎田上の

左衛門

7オ ○本領―(他本) 無二の本領

7ウ ○三方よりも…きつて入―(慶) ナシ

8オ ○所なり―(他本) 所の安堵なり

8ウ ○是はよからぬ御誕かな―(慶) ナシ

9オ ○かしまへ使者をたて神主いそぎしやうじよせ―(毛・内) 急き鹿嶋へ使者をたて神主をめしよせ ○きげん―(他本) 気色

9ウ ○あたる所を…ひとつとゝめ―(毛) ナシ、(内) たもとを取てひとつとゝめ

11ウ ○近江の国に―(毛・内・打・慶) 日かすやうくかきなり近

江の国に

12オ ○たれかある…いそげくと仰けれとも―(毛) 誰か有とめさるれと、(打・慶) 誰かあるなけきてもかなふへき道かいそげくと仰せけれとも ○一人を捨ては―(慶) 吾人をばなにとな

れとおもひて捨ては

14ウ ○我等―(毛・内・松・藤) 我、(慶) 所詮 ○びん隙をうかゞ

ひ―(打) ナシ ○ひたちへは―(他本) 信田へは ○かぎりあ

らば…すべけれ共―(毛・慶) ナシ ○とき世にしたがふならひ

とてあね聲殿を―(慶) 小山殿を

15オ ○一刀うらみんため―(打) おやまを一刀うらみむため

16オ ○太刀わきばさんたる男の…ひつこうだるが―(毛) あみかさ

ふかくとひつこふたる男の ○御供申―(他本) ナシ ○この程汝等か余りに恋奉りしに―(毛・内・打) 此程汝等かこひたて

まつりしに、(慶) 余になんぢらが恋たてまつりつるに、(松・

藤) あまりになんぢらが此ほどこひ奉りしに

16ウ ○時々見てめさまいて―(打) ナシ

17ウ ○爰をせんどゝたゝかひけれども大勢うたせひつかへす―(慶) ナシ ○かくてはいかゝあるへきとて…一のきどまで責入

けれと是も大勢討せひつかへす―(毛・内・打) ナシ、(慶) 一の城戸迄せめ入れれども大勢うたせて引返す

18オ ○浮嶋申けるやうは―(慶) 浮嶋太夫楼の上にて大音上て申

○世にある人を主に持申…いつ迄いきてなんどき世に出へしと覚

えず―(毛・内・打・慶) ナシ ○はりがへあまたもたせ矢びつ

三がうかゝせ―(毛) ナシ

18ウ ○かすほなるかみをからはにあげ―(毛・打) ナシ ○くまのかわのもみたひ…獅子に牡丹のわいだてし―(毛) ナシ

- 19オ ○四十二さいたるたかうすべうをはず高にとつて付ー(毛)ナシ ○しめのせきづるかけさせまん中にぎりよこたへてー(毛)ナシ ○七寸八分あけ六歳にー(毛)ナシ
- 19ウ ○父の太夫ー(毛)浮嶋夫婦、(打)浮島太夫 ○あれく女房御らんせよー(毛)ナシ
- 20ウ ○祖父も祖母もー(毛)夫婦の者も
- 21オ ○乗いれてー(他本)乗つれて
- 22オ ○子共かー(毛・内・打)子共かこゝろの ○されは此君の祖父まさかど…よかりし故とおぼうるなりー(毛・内・打・慶)ナシ
- 23ウ ○わうとならせ給ひしかー(松・藤)主となつて八ヶ年を御たもち有しが、(慶)王となつて八ヶ年をたもち有しが
- 23オ ○よま所へつと入ー(毛・内・打・慶)ナシ
- 24ウ ○去間信田殿ー(毛・打)信田殿心におほしめす ○自害をせんー(毛・打)腹を切ん、(慶)御こしの物をぬき持てじかひをせん ○小山此よし見るよりもー(松・藤)小山殿御覧じて ○こなたへ御出候らへー(毛・打)ナシ ○されは人の果報の有時は…末の世とても煩たり去なからー(毛・慶)ナシ
- 25オ ○時世に随ふ習ひとてお山殿につかへ申ー(慶)ナシ ○いましめたりし其上を重てつよくいましめー(毛)ナシ
- 26オ ○うき物もちて参りたりー(毛)ナシ
- 26ウ ○すでに其夜も更ければー(毛・内)夜更ければ、(打)夜すてに更ければ
- 27ウ ○もとりけりー(松)帰りけり
- 28オ ○天明ければー(慶)すでにその夜もあければ ○おやま殿御らんしてー(毛・内・打・慶)ナシ ○あらけなきものゝふ共か…はらりとたつてー(毛)ナシ
- 29オ ○いかつてー(松)はらをたち ○お山殿御覧してー(慶)自身立出つくくみてか程にくわほうめでたき身をよしなき信太殿におもひ詰をとしぬるこそくちをしけれ
- 29ウ ○物うさにー(毛・内・打)痛しさに
- 30オ ○運のきはめのかなしさはー(毛・内)ナシ ○せうけにー(毛・内・打)本に ○夜もすからこしらへたりー(打)ナシ
- 30ウ ○信田殿聞し召れてー(毛・慶)ナシ ○信田殿心におほしめす…をくられ京へのほらせ給ふー(慶)ナシ ○さきの上りには萬場の宿よりも送られけるかー(毛)ナシ ○あすのなげきを知らすしてー(毛・打)ナシ ○不案内の御事なればやかて御宿をもひけい申さんとてー(毛)ナシ
- 31オ ○わう三郎が本よりも鳥羽の舟戸へうるー(毛)ナシ ○信田との心におほしめさす…見つるかなとおほしめしー(毛)ナシ
- 32オ ○とまり定めぬうかれとりー(藤)ナシ
- 32ウ ○もんくかどにたゝずんてー(毛・内・打)ナシ ○尉一人ー(慶)年たけよはひかたふきたるぜう音人 ○信田殿をみ参らせー(内・打)ナシ ○あらをそろしや。このほと待たりしー

(毛) ナシ、(慶) このほどまぢまうけたる

33オ ○ろかひのおれ…いつくの程に候と—(毛) ナシ ○しだ殿を
見つけ申—(毛・内・打) ナシ ○先一つあつゝそうつたりけ
る…いとよはやりたるわかもの共か—(内・打) ナシ ○いたは
しや打ふせ申—(内) 信田殿を打ふせ申すあら痛はしや、(打) し
たとのを打ふせ申あらいたはしや信田殿、(慶) 信田どのを打ふ
せ申たりければあら痛はしや

33ウ ○こうたりけりわかきもの共承り—(毛・打) 有しかは若き者
共是をきよ、(内) 有しかは若き者共承り ○つゝを捨てそ—(内
・慶・松・藤) 女房の仰成共承る事もあるへしまたうけ給はらぬ
事も有あらふす此事にをひては思ひもよらぬ事成とひたうちこそ
打にける女房余りかなしさに酒をもらふそたすけよ酒とたにも聞
ければをとなしきからわらべ迄杖を捨てそ ○かくて信田殿を…
よきにいたはりたてまつる—(慶) ナシ ○いにしへほとはなけ
れどもかたちもすこしなをらせ給ふ—(毛) ナシ ○としくし
ほをあきない—(毛) ナシ

34オ ○おさへてしほにかへとり—(慶) ナシ ○十八日と申すには
—(慶) 十八日と申にははるかのおくむつのに ○此あたりに
すむものはしほをやかては身は過ぬそ—(毛) ナシ ○いとよ塩
たれころもきて…火をたくこそはものうかりけれ—(毛) ナシ
34ウ ○はま出して—(毛) ナシ ○しいれなんどのじんじやうさよ
—(毛) ナシ

35オ ○かくて元服をさせ申—(慶) いつきかしづき給ひけりかく
てげんぶくせさせ申 ○あらめてたや—(毛・内・打・慶) ナシ
○それも座しきのろん…せんなき事も有しそかし—(慶) ナシ
35ウ ○ちやくぞん—(毛) ナシ

36オ ○名のらはやとおほしめすか…養父の父母のはぢといひ—
(毛) ナシ

37オ ○おしなべて—(毛・内・打・慶) ナシ ○金銀れうら—
(毛) ナシ

37ウ ○是はいかさま—(毛・内・打・慶) いやく是は ○何の系
きやらんと—(毛・内・打・慶) 何の系きあらんはやく御出候
へと ○期したれば—(内・慶) 期したればはしめてきはぐに及
はずと

38オ ○なふいたふな—(内) なういかに姫君いたうな ○おつとの
千原がしだどのの御いのちには—(毛・内・打) 信田殿の御命に
は夫のちはらか ○とよめをかせたまへとも—(慶) とよめおか
せ給へともひまのなければ

38ウ ○あたりたつときたつとき寺により—(毛・内・打) ナシ

39オ ○くまのゝたうを—(他本) 清水に参りて南無大悲観世音よる
つの仏の願よりも千手の誓はたのもしや今一度信田殿にあはせて
たはせ玉へやときせいふかくそ申さるゝ

40オ ○あさくらや—(慶) ナシ

41ウ ○おしなべて—(毛・内・打) ナシ ○ちよ母の、けうやうの御

為に―(慶)おなしく

43オ ○さていかにもつらしや―(毛・打)ナシ

43ウ ○お山此よしつたへき―(毛) 小山此由聞よりも ○国にこ

らへがたうて―(慶)かなふべきやうのあらずして ○朝の露と
消けるをにくまぬものはなかりけり―(毛) ナシ

(十番切)

建久四年五月廿八日の。夜半計の事なるに。曾我兄弟の人々は。親のかたき助恒をおもひのまゝに討すまし小柴のかけへさつと引しばらく息をそつきにける。すけ成仰けるやうは。いかにや五郎。本望をほとけぬ。いさや腹をきらん。時宗うけ給はり。御説尤にて候さりながら頼朝は。我らか祖父伊藤のかたき。余の者千騎万騎より。次而をもつてみたれ入。御れうを一かたなきり申。名を後のよにのこすへし。助成(1オ)

きこしめされて。けに―是はいはれたり。親のかたき助恒にとゝめをさしてありけるか。時宗うけ給はり。あれほとになりてはなんの子細の候へき。すけ成きこしめされて。それはさもなし五郎。明て突検あらんとき。あはてたるかおくしたるか。わかげのいたす所か。あつたらおやのかたきを。討はよくうつたれとも。とゝめをさゝで打捨にしたるなんとゝいはれては。かばねの上のちじよくたるへし。時宗うけ給はり。あさらはそれ(1ウ)

に御待候らへ。とゝめをさして参らんと。ありし所に立かへり。たい

松ばつとふりたて 「クトキ」すけ恒を見てありければあともまくらも見もわかす。され共しがひを引上。むなしきかはをつく―と見。かまへて迷途黄泉まで。われらうらむる。事なかれ。日比つくりし罪科の。たゝ今むくふと思ふへし。我等かちゝの河津とのに。たむけんための。めいたうなり 「フシ同」さこそ尊靈。河津とのうれしくおほし。めさるらん 「コトハ」いひもあへす時宗。こしの(2オ)

かたなを引ぬいて。小耳のねにさし立。すこしはたらくやうなるをおしうこかして云けるは。いかにやとのすけ恒。此刀と申は御刃かひそうせしかたな。近昔頼朝の。はこねまふでの有しとき。御へんはとき御供にて。まことやらん此山に。河津殿の三なん箱王丸か有なるに。見参せんと呼出し。なにかしにたへいめんし。おとなしくならんはと。わきさしにせよとて。此刀を取出し。なにかしか腰にさし

「カ、ルフシ」はやかへれよといひし時 「同」親の敵(2ウ)

と。聞なれば。外をはもとむへからず。此かたなにてたゝ中を。一かたなとにらみしを。こじの法師かいろを見て。寺中に大事をかけしとて。おしへたてかきいたき。本坊にかへりぬ。さて其後に此かたな。うしなはてもつ事は。たとひとし月をくるとも。御へんはもとの。ぬしなれば。かへさんず。其ために今までもちて。あるそとよ。かねは兼てそしつらん。こゝろみ給へといふまゝに。めての小耳の下よりも。弓手へとをれと三かたなさす。かたな目か。しげく(3オ)

して口とひとつに。なりにけり。明てじつけんありし時。宵の座しきのさうごんに。口をさかれけるかと。御評。定はとり―なり。され

ともゆふ女二人か。はしめをはりを。かたるにそとよめにこそは。なりにけれ。「イロ」宵には晴てありけれとも。敵討ける其時刻に。空かきくもり五月雨卯の花ぐ。だしぞ。ふりにふる。「コトハ」辻々のかゝり火も。一度にはつと消ければ。東西にはかにくらく成てぞんごをさらにわきまへず。され共思ひきりつゝ。大音(3ウ)

あげて呼はる。たゞ今御れうのかりやの御前にて。親のかたきすけ恒を。うつて出る兵者を。如何成ものとおほしめす。伊豆の国の住人。

伊藤かまご河津か子。十郎助成。五郎時宗こゝにあり。たう君の御内に。ゆみとりたちはおほせぬか。なと出合て討とよめ。名を後代にあげ給はぬそと声々に呼はる。くらさはくらし雨はふる。御陣にはかにしんどうして。弓張太刀一ふりに。二人三人とり付て我か人のとうばひやう。つなぎ馬にのり(4オ)

なから。鞭をうつ所もあり。みかたどしかくみ相て。かたきとおもふ所もあり。「ツメ同」前後不覚に。ひしめいてはや上を下へそかへしける。され共一番にたいらくの平馬の尉と名乗て。夜討はたそ珍しや。我々かまのまへにて。ちうぜきをせさせすまじい手なみのほとを見せんとて。おめきさけんで切て出る。すけ成きこしめし。かほとに多き人中に。一人名乗て出ること。たくあすくなきつわものなれ。曾我の十郎爰にあり。うけてみよと云(4ウ)

まゝに。小柴のかけよりつと出てもつてひらいてちやうとうつ。弓手のうてくび打おとされて。ことばにはにさりけりはやまくの内へそ引にける。二番にあいきやうの。三郎と名乗て。五郎に無手と渡り相。

二のうできられ引ている。三番に御所方の。九郎弥五と名乗て。十郎殿に渡り相。かいかねきられ引て入。四番にもてきとの。五郎にむすと渡り相。ひざの口をわられて。御内をさして引給ふ。五番の度には。いせの国の住人に。吉田の三郎もろしげ(5オ)

十郎殿に渡り相。高もよなかれ引て入。六番には吉川と名乗て。五郎にむすと渡り相。こびんをきられ引て入。七番にはしな川と名乗て。十郎殿に渡り相。めてのこわきをきられて。幕のうちへそ引にける。八番の度には。甲斐の国の住人に。市川の別当太郎忠隅。大音上て呼ばるやう。夜討といはんは何ほどの事の有へきそ。手なみの程を見せんとて。おめきさけんできつていづる。時宗是をき。汝は音に聞えたる。白井か到(5ウ)

下なんとにて。盗こそうなりとも。はれわざのきり相は。是はしめにてあるらん。うけてみよといふまゝに。もつてひらいてちやうとうつ。細首ちうに打落されて朝の露とそ消にける。九はんに筑紫武者。白木の七郎もろすみ。十郎殿に渡りあひ。まつかふわられ引て入。十番の度には。にたんの四郎忠綱。大音あげて呼はるやう。何さま東西くらふして物のあいろの見えぬに。車松だせと呼はつたり。助成聞召し。たい松このみするやつに(6オ)

手なみの程を見せんとて。爰をせんと切給ふ。天地にひらめく太刀のかけはたゞ電光のことくなり。其隙にたい松を。我おとらしとさし出す。簾うつは養笠。さして唐かさなんとをは。よきたい松と火を付る。まんどろゑにもことならず。いとよいさむる兄弟か。此火の光

りにちからを得。こゝせんど切たりける。其夜五郎か手にかけ五十一人に手を負する。直にしするは只一人。別当太郎計也。とても今夜は過すまい罪作り(6ウ)

にと思ひければ人をはさふなく切さりけり。名字を名乗て出るをこそ。十人とはしるされけれ。兄弟か手に懸て鬪討の捨刀數をも知らぬ所なり。「コトハ」さて助成と忠綱は。爰をせんど切給ふ。少足立かたさかり。うわ手に成て十郎殿。にたんを下へ追おろさんと。走りかゝつて打太刀を。忠綱さらりと請なかし。つかをついてすそをなく。十郎のめでの力足。ひざの口をさしきげつと切てそ落しける。「カ、ル」弓手のあし計にて。半時おどつて戦たり。「フシ同」是や此れうわらの(7オ)

。暮日にむかふ銚の手。入日を返し一おとり。うしろをふせきこす刀。百手をくたき。たゝかへと。さのみはいかでこらふへき。いぬるにとどまろひる。あたりに五郎やある。助成こそ唯今。にたんに合てうたれさへ。同じよみちと。云ながら。忠綱に合て。討るれば恨とは更に思はず。御へんは命をまたふして。君の御前に参つ。我等か有様申てしね。はやくびとれや忠綱。にたん首を打落す。まんする歳は。廿二おしまぬ。者は。なかりけり。「コトハ」さる間時宗は(7ウ)。弓杖三つゑほと隔て。大せいの中に爰をせんど戦しか。助成の最後の詞をき。はやうつ太刀もよはりはて。前後不覚に成ければ。かくては叶はしと思ひ。かたきを四方へ追ちらし。御内をさいて切て入。爰に御前の五郎丸と申て。十八歳に罷成。八十五人か力なり。腹

巻の上にくす綱かつき。髪ゆりかけ。太刀脇にはさんて。今やおそしと相持る。是をは知らず時宗。妻戸をはつとけやぶつて。御内をさいて切ている。五郎丸やり過し。えたりやおふと云まゝに。弓手すか(8オ)

りにだいたりける。時宗是を見て。あふ女と思ひ見そんじて。いたかれぬると後悔す。去共事の數にせず。「ツメ同」中にづつと引立てあふ七八間こそ走けれ。五郎丸是を見て。叶はしと存すれば。夜うちをばくみとめたるそおり合やつと呼はつたり。此こそ系にしたかつて。おりおふ人々誰々そ。みとの九郎源八。すだの太郎民部少輔。我もとおほしき大力。七八人おり合て。手とり足取繩かけて大将殿へおつ立る無念たくるはなかりけり。「コトハ」去間頼朝。夜討(8ウ)

まちかく参る由を聞召。御腹巻を召れ。小長刀よこたへてゆるき出させ給ふ。爰に大伴の一ほうしと申て。九つになりけるわつは。御まへに長り。如何成御事候そ。すでに君は。征夷將軍にてましますは。野心の者なんとをは。居なからこそしつめさせ給ふへきに。懸る小事なんどに。御手をおろさせ給はん事。かる／＼しくもや候へきと留め申たりければ。御れう実もおほしめし。とままり給ふ処に。あんのごとく夜討取て。庭上に引すゆる。頼朝きこし召れ(9オ)。あふいしくも申たる一ぱうしかな。父大伴かつたへき。さこそ悦び申さんするに。えほし子にせんとの給ひて。大伴の左近將監吉直とめされ。「カ、ルフシ」大隅薩摩を下さる。[同]時の面目。よの聞え。何事か是に。まさるへき。「コトハ」去間頼朝。夜討に御対

面の為。青狩衣に立えほしめされ。ひろひさしまて御出有。夜討はいつくに有七近ふめせとの御説なり。承ると申て秋かこつほに引すゆる。頼朝御らん有て。曾我の五郎時宗とは汝か事(9ウ)

か。さん候。親のかたき助恒をうつは道理と云ながら。京鎌倉のおり上り。道の末にてもうたずして。頼朝か祝ひの座敷に。血をあへす糸いはれなしこれ一。かたきならば助恒一人をこそ討へきに。当番の者共に手を多く負ふる糸いはれなしこれ一。かたき討て後。内所をさいて切て入。頼朝に敵をなす糸いはれなしとく申せ。時宗承。さん候すけ恒は。君の御覚目出度し。よき者あまためしつかひ。京鎌倉のおり上りにも。五十騎百騎(10オ)

にはおとらす。かなしきかなや我々は。君の御勘当をかうふり。身はとくしんとなりはて。おとより外。見つぐ者なきにより。此かりくらの人こみをさいはひと存知。紛れ入て討て候。仰のことく兼ては。助恒一人をこそ打へきと存つるに。当番のめんくか。中々名乗出。臆病刀つかふて。にげ足ふむかにくさに。おどしにちつと太刀風をおふせつる計也。重恩をまきに襲り。妻子を扶持し身を立て。人と成かたくか。是ほと御所中へ。夜討の入て乱るに(10ウ)

。誰こそすゝみ命をすて。君の御せんに罷立んとつかまつたる者も候らはず。とさまなれ共にたんと。御内の五郎丸より外御用にたつへき者もなし。御一族にておはします。もて木の四郎殿こそ。四番めに御出あり。膝の口をわられて。足か叶はて御引あれ。其ほかの手負共。皆召出して突検あれ。むかふ疵はよもあらし皆にけ疵にて候へし。懸

る臆病者共に。あつたらしき御所領を。徒にたばんより。我等に少くたされ。御芳志に預らは(11オ)

是程まではぐまじい。たとへは祖父伊藤こそ。謀叛人にて候らへは。子孫我等にいたる迄御にくみあるは御道理。去ながら文所にはいかりをたて。おんにむくへはかたきもみかたとなる。親子兄弟なれ共。欲心内にふくめは。とにてきと書れたり。せんひをくいごゝのせにしたかへと。古人もをしへをかれたり。祖父伊藤もひがことなし。昔源平両家の時。天か下の弓取。二張の弓に一筋のつるをかけ煩。昨日源氏へ引弓を。けふは又引かへて。平家にひく(11ウ)

やからもあり。「カ、ルフシ」かやうに人はせしかとも。「同」伊藤は心。二つなくきれて。弓矢を取しなり。か様にゆみ矢取ものは。たのもしき弓取。たうせんと。是を名付たり。それに伊藤か子孫を。うとみはてさせ給ひて。めいを次へき便もなし。龍鳥の雲を乞こちうのうはの。わつかにあわに。いきつく風情にて。生てかいなきうき身となり。逆も。我死に及はんより。親の。かたきと討死し。名を後代に。あげんため我か君。とこそ申けれ。「コトハ」頼朝聞召れて。さほと剛なる(12オ)

者か。何とて五郎丸にはさうなくとられぬるそ。内所をさいてきつて入。頼朝にてきをなすてういはれなしとく申せ。時宗承。あふ御尋あらは申へし。さん候助恒は。親のかたきと云ながらさしも恨はのこらす。せめ一陣にきすと申ても余りあり。うらみ申ても尽せぬは君の御身にてとゝめたり。それをいかにと申に。たとへは祖父伊藤こそ。む

ほんんにて候とも。名にあるものゝ子孫を、いかてかたやし果んと。二人か中に一人をも。召出れ申。けんめいのかた(12ウ)

はしをも。安堵をなし給はらは。縦助恒うちたくとも。思ひこらへて本領に慰ても過ぬへし。されは弓取の命にかへておしきは。けんめいの本領也。それに一所ものこらす。召上らるゝのみならず。あまつさへ。親のかたき助恒に一円に下され。上見ぬ驚とふるまひし。「カ、ルフシ」かゝる恨の教々の。「同」其水本を。尋るに君の御身にて。留たり。助恒よりも。さきにそと。心をかけ申せしに。それに手にたつものもなし。五郎丸。絹かつきかみ。ゆみかけて。有つるを。女と思ひ見そん(13オ)

じて。さふなくとられ。候らひぬ。五郎丸たになかりせは。あつはれ君の。御いのちはあやふ。かりつるものをや。「コトハ」頼朝聞召れて。あつはれ大かうの者かな。たとひさ有とも。我か前にてはさなしとこそいふへきに。思ひの色を残さず申つる事。神妙にこそ思しめせ。但。親のかたきや討んとて。まゝ父曾我にはしらせさりけるか。京の小次郎越後のぜんじ。二の宮の姉嫁。母にはしらせさりけるかとく申せ。時宗承り。さん候小次郎は。本所に艦候仕り。隙なき身にて候らへは(13ウ)

。寄合事なきによりしらする事も候らはす。越後なるぜんじ坊は。経よみ念仏申。親の跡とふその子を。ころして何にせんとしらする事も候らはす。二の宮の姉嫁は。世になき子舅とくみし。一所けんめいうしなはしと。よも申さしと存しらする事も候らはす。「クトキ」母に

はしらせたく候らひつれ共。人のおやのならひにて。わかき子共をいたし立。もの思はんと云親の。代にもあらしと存知しらする事も候らはす。まゝ父はなさぬ中。「フシ同」継父。継母の昔より。中よき事の(14オ)

。あらされはしらすとこそ。申ける。「コトハ」頼朝聞召し。実々それはさそあるらん。今はとうへき事もなし。はや／＼いとまとらせよと仰ける処に。すけ恒かちやくし大房と申わつは。いつくよりかはきたりけん。こゝもおしまずわつとなき。持たる扇にて。時宗か面をちやう／＼とうつたりける。時宗是をみてにつこと笑ひ。あふいしくもうつ犬はうかな。「クトキ」浦山しやな汝は宵に父をうたせ。今朝手にかけてうつ事よ。かなしきかなや我々は。五つや三つの年よりも。父を汝(14ウ)

か親にうたせ。野に伏山にかくれぬ。つゞやはたちにあまつて。「フシ同」討たるたにも。嬉しきに。さこそ大房か。心も尽さすおこのけなく。うつをうれしく思ふらん。是も。君か御おんそよ。わとのか腕に叶ふまし。うつてはらたに。いるならば。いかほともうてや。大房と顔ふり。上て。うたせけり。「コトハ」御まへなりし人々。此よしを御らん有て。弓取に当座の恥辱をあたふる事。もつたいなしと申て犬ばうをだきいるゝ。かかりけるところに。二たんの四郎忠綱は。助成の首を引さけて御前(15オ)

に畏る。頼朝首を突検ある。あらむさんや時宗か。たゝ今までは。剛の眼を見はつて。ちつともわるびれさりし気色もかはり。「クトキ」

涙をなかしうつぶしになり。あらいたはしやはやくもかはらせ給ひたるや。ちくばに鞭をうちしより。一所におき伏。少見えさせ給はねは。とやあるらん。かくや渡らせたまふらんと。「フシ同」心をつくし申せしに。かなしきかなや今ははや。五たひふうべつつゝかねは。有し形もかはりはて。いたつら事と成にけり。とくして我もかくなりて。同じ道にと思ひ(15ウ)

ければ。つゝめとこほるゝ。涙は庭の。しらすに落に。けり。「コトハ」頼朝よりの御殿には。大剛一のおつわものなれば。たかゞ岡にてきれとの上意なり。承と申て。時宗を引立て鷹か岡へそ急ける。たゞよの常の弓取たにも。最後の鉢は面白きに大剛一の時宗か最後を見んとて。貴賤くんじゆをなす。時宗人の多きをみて。あら口おしや。か程の高座にて繩の恥に及ぶ事よ。よし／＼それも時宗か。山賊海賊を。したる身にても(16オ)

あらはこそ。父母教養の其為に。ついたるなわにて有間。神の前にてみしめ繩。「カ、ルツメ」仏の前にて善の綱。「同」経のひほとも云つへし。心あらんすゆみ取違は。よつて手かけて結縁せよや。人々と云まゝにたかゞ岡へそ急ける。「コトハ」鷹か岡にも着しかは。九本の松の下に敷皮しかせなをり。時宗申けるやうは。此松の下にてぎられん事は。偏に九ほんの浄土と覺たり。いかに太刀取繩取も。少の暇をゑさせよ。時宗か最後の一句に。浄土の三部経を(16ウ)

あら／＼談して聞すへし。有難き哉やみた多しやう法万徳の位。三世の諸仏出世の本懐は。衆生成仏の直道也。座禪修行の伝受に至りかた

きものは。六字を唱て極楽に往生す。一しをさゝくる其時は。大千世界も愛にあり。「片ツメ同」竹をうつたふを見てごだふする事分明也。妙楽大師の御しやくにいわく。諸教諸讀。多在弥陀ととく時は西方をもつて先とせり。唯心の弥陀。己心の浄土なれば。本来無東西何所有南北とくはん(17オ)

すへし。其六字の号を。集る経輪は。花嚴經にて南の字を作り。阿含經にて無の字を作り。法華經にて阿の字を作り。大般若にて弥の字を作り。法花經をもつて。陀の字を作て。南無阿弥陀仏と申なり。十方三世仏。一切諸菩薩。八万諸聖經皆是阿弥陀ととく時は。聽聞の老若。かうへを地に付時宗を拜まぬ人はなかりけり。彼時宗と申は。おさなかりける時より。勤行おこたらす。一心三巻の月は。無明の闇を照し。観念の窓の前には(17ウ)

まゆに。八字のしもをたれ。一じつ中道の車は。無二無三の門にとよろき一乗菩提の駒は。平等大乗のそのにいばふ。とうがく一天の時鳥は。明覺大乘の横になき。にうじんげんもんの鶯は。げゝ衆生の谷にさえつり。諸行無常の春の花は。是生滅法のかぜにちり。生滅々意の秋の月は。じやくめついらくの雲にかくるゝ。ばんさんにふん／＼しかくのごとくと有物を。只念仏と申へしと及ぶも及ばさりけるもみな念仏申けり。「コトハ」是は鷹か岡にての事。扱も君(18オ)の御まへには。和田ちゝぶ北条殿取々に申さるゝ。かの時宗と申は。大剛一の兵者。又は名にあるものゝ子孫なれば。たすけ御置候らへかしと。各申されたりければ。頼朝も内々。たすけたく思召るゝ処に。

人々の申されけるをうれしく思召れ、直心安堵の御状をあそはし。甚平右馬の尉にたゞ。去間右馬の尉たて文もつて走り、やあ其時宗なきつそ。和田ちよぶ北条殿。君へ申させ給ひ。たすけ給はんする御教書なり。是々拜み申せとて時宗か膝にをく (18ウ)

〔カ、ル〕小手のなわをゆるされて。たからかにとそよふたりけれ
〔ヨミモノ同〕下す状相模の国の住人。曾我の五郎時宗はやく。くわんにうすそれくわをてんして。忠となすしんかふは人に有てしかもみやうの。智見たり親にけふの。ふかきものは。天道の。たすけあり是によつて。頼朝もれんみんをはけまし。非をいたしへて。りになせり天下爰に。かななふすそくはくの弓取。たうけんを捨てき。なんだ袖を。うるおふしおんこんにきく者。ひるいきもに。めんじたり是を更に。ちうばつし死罪に (19オ)

なし。おはんはなきうの家たえ弓馬の道は長く。すたりなんあふきても猶。あまりあり樂喧にくらふれば。時宗はまされり。長良に。あはずればかうそのなせし。いせいたり一天四海か。其内にかくれぬかうの。者なれば先きの。非を返し今より後は。頼朝に住進たるへし本領なればうきみくづみ河津三ヶの庄永代安堵の御状如此みなもとの。頼朝判とそよみ上げる。貴賤上下のけもん衆。一度にあつとかんしつゝゆゝしの人の果報やとよろ (19ウ)

こぼさるはなかりけり 〔片ツメ〕去間時宗。御教書いただき。涙をなかしつゝ。あら有難や。同じくは此御状舎兄すけ成もろともに拜むとたにもおもひなは。いかゞはうれしかるへきに。惣領のすけ成。今

はうき世におはせねは時宗ひとりなからへ。惣領をつぐとも。生たるしるし有ましい。只々きらせたまへと申こふてそきられける。見る人目をおとろかし聞ものは是をかんしけり君もあはれにおほしめし上古も今も末代も。かゝるゆみ取ありかたし (20オ)

・あまり剛のものなればあら人神にいわへとて。富士のすそのに。社をたてゝ。兄のみや弟の官と申て。いわゞせ給ひけるとかや今当代にいたるまで。親のかたきを討人。此やしろにていのれは。たちまちかなひけるとかや (20ウ)

【校異】

本曲において校異に使用した本は次のとおり。(松)松村本(藤井氏一本)、(毛)毛利家本、(打)打波家本、(慶)慶応大学伝小八郎本。

1オ ○いかにや五郎―(慶)ナシ ○御説尤にて候…次而をもつて
みたれ入―(慶)御説尤にて候らへどもともしせん命にて ○
きり申―(慶)うらみ申 ○のこすへし―(慶)残すべしいかゞ
と申たりければ

1ウ ○親のかたき助恒に―(毛)但親の仇助経に、(打・慶)但親のかたきに ○わかげのいたす所か…討はよくうつたれとも―
(慶)ナシ ○ちじよくたるへし―(慶)ちよよくたるべしい
かゞはせんとしたまへば ○時宗うけ給はり…それに―(慶)其
儀にてさふらはゞしばらく ○それに―(毛・打)ナシ

2ウ ○引ぬいて―(毛・打・慶)するりとぬき

2ウ 3オ ○小耳の…こころみ給へといふまゝに―(慶)ナシ

3オ ○めての―(慶)弓手の ○弓手へ―(慶)めてへ ○しげくして―(慶)かさなりて

4ウ ○くみ相て―(毛・打・慶)折合て ○おめきさげんで―

(慶)おごゑをあげて ○つわもの―(慶)弓取

5オ ○二のうで―(慶)小鬘を

5ウ ○ごびんをきられ―(慶)もろひざながれ ○有へきそ…おめきさげんできつていづる―(慶)あるべきとおごゑをあげてきつていづる

6オ ○うけてみよ―(慶)手なみみせん ○もろすみ―(慶)ため

しげ ○にたんの四郎―伊豆の国の住人ににたんの四郎 ○聞召し―(慶)御らんじて

6ウ ○愛をせんとし切給ふ―(慶)いれちがいてきりむすぶ ○こゝせんどし切たりける―(慶)さんぐにきつたりけり龍が雲を引れ虎が風にけをふるつて華金が鋒を振長良がいきほひも是

にはいかでまさるべき

7オ ○愛をせんどし切給ふ―(慶)愛をせんどし聞けるが忠綱すこし手負圖迄そ十郎殿暇申てさらばとてとつてかへしてひいてゆく

祐成つといておつかけ情なしや新田とても今夜はすぢすまじい名もなきいげの雑兵の其手に懸てころさんよりかへしあはせて勝負をせよ忠綱とおつかくる新田げにもといふまゝにとつてなをし

て切給

7ウ ○さのみはいかで―(慶)弓手の足計にてさのみはいかで

8オ ○弓杖三つゑほと隔て―(慶)ナシ ○愛をせんどし―(慶)ナシ ○太刀脇にはさんて―(慶)とある所にひつそうて ○今やおそしと―(毛・打)今やいつやと

8ウ ○おりおふ人々誰々そ…すだの太郎民部少輔―(慶)ナシ

9オ ○如何成御事候そ―(慶)ござかしき申事にて候へども ○願朝きこし召れて―(毛・打・慶)御らんあつて

9ウ ○青狩衣に立えはし―(毛・打)御装束をあらため青狩衣に立烏帽子 ○萩かこつばに―(毛・打)時宗をひつたてゝ萩が小坪

に

10オ ○君の御覚目出度しよき者あまためしつかひ―(慶)ナシ ○五十騎百騎…かなしきかなや―(慶)よきものあまためしつかひ

うつときは五十き百きうたぬ時も二十き三十きには負不

10ウ ○なきにより―(毛・打・慶)なきによりつきそひねらへども隙がなくして(慶)折をえざれば)打もせず此かりくらの

11オ ○四番めに御出あり―(慶)ナシ

11ウ ○せんひをくい…古人もをしへをかれたり―(慶)ナシ

12オ ○さほと剛なる者か…とられぬるそ―(慶)あおうよの事はさとおきぬ仇うつての其のち頼朝が

12ウ ○あふ御尋あらは申へし…それをいかにと申に―(慶)左候御たづねならば申べし

14オ ○人のおやのならひにてー(慶)年寄跡に残居て ○もの思はんと云親のー(毛)年寄跡に残りゐて物おもはぬといふ親の

14ウ ○頼朝聞召しー(毛・慶)ナシ ○実々それはさもあるらんー

(慶)ナシ ○こゑもおしますー(慶)時宗をみるよりもこゑもおします

15オ ○野に伏山にかくれるー(毛・打)十八年の其間野に伏山に隠居て、(慶)野にふし山にかくれるて心をつくしきもをけし ○此よしを御らん有てー(毛・打・慶)ナシ ○引さけてー(慶)

太刀のさきにつなぬひて

15ウ ○うつふしになりー(慶)かうべを地につけ

16オ ○しらすに落にけりー(慶)白洲もぬれぬべし ○頼朝よりの御説にはー(毛・打・慶)ナシ ○大剛一のつわものなればー

(打)大かう一の時宗なれば、(慶)時宗が太刀をとりいだしてこれにてきれとの御説也時宗是をみてあらふしぎや此太刀は■年京へのぼりし時四条町にてかひとり今夜うちも是にてうつ我らがくびも此太刀にてきられん事のふしきやと申せしことは此太刀のいでどころをかくさんたためのことばなり去あひだ時宗

17オ ○談して聞すへしー(慶)談じてきかせ申さんそれほつけ一ぜ

うのくりきはたつとし ○直道也ー(慶)ぢきだうなりぐちなる衆生にいたりてはかうじやうはうもんなり ○ととく時はー

(慶)ナシ

18ウ ○取々に申さるゝー(毛・打)取々の御訴訟也、(慶)せせう申

されけるやうは ○去間右馬の尉ー(慶)御所の神平右馬の尉

○やあ其時宗なきつそー(慶)たかど岳にもつきしかば其時宗なきつそ子細あり

20オ ○上古も今も末代も…あまり剛のものなればー(慶)かほどかうなるつはものはしやうこもいまもまつだいためしすくなきゆへ也

20ウ ○かなひけるとかやー(慶)かなへたまふなり

(大臣)

抑むかし我朝に。嵯峨の帝の御時。左大しん公光と申て。その比ならひなき賢仁一人おはします。しかるにかのきんみつに。御代をつくへき御子なし。かくてはいかゝ有へきとて。大和の国にきこえたるはつ瀬の寺にまふでして。ひぐわん尽せぬ観音の利生をあふき。三十三度のあゆみをかけ申子をこそし給ひけれ。今にはしめぬ観音の。ねかひのしほもはやみちて。程なく御子をまふけ給ふ。しかも男子にておはします。夏の半の若(1オ)

なれば。花にもよそへてそたてよとて。百合草とのと名を付いつきかしつき奉る。七歳にて御袴き。十三にて初冠をめし。四位の少将のと申てならひなふこそかしつきけれ。十七にては必。右大臣になり給ふ。御わらは名によそへゆり大臣と申す。三条みぶの大納言。秋依の卿の姫きみをむかへとり奉り。ゑんなうひよくのかたらひは浅からすこそ聞えけれ。かくて打過行ほとに。抑我朝と申すは。国とこたちの

みことよりも初(1ウ)

。さて伊弉諾伊弉册は。かの國にあまくたり二柱の神となりて。第一に日をうみ給ふ。伊勢の神明にて御座ある。其次に月をうむ。高野の丹生の明神月よみのみ子はなり。その次にうみをうむ。津の國にたち給ふひる子の御子。あひす三郎とのにてまします。其次に神を生。出雲の國そさのをは。大社にておはします。其外まつしやのふるひとうは。「カ、ルフシ」みな此神の齋社たり。「同」神の本地を仏とは。よくも知らざる言葉かな(2オ)

。根本ちの神こそ。仏とならせ。給ひつゝ衆生を。けどし給ふなれ。それはともあらはあれ。そも我朝と申は。よつかひよりはまさしく。魔王の國と有へきを。しん自ひらき。仏法護持の國となす。大まわうたけ。自在天に腰をかけ。種々の方便めくらし。いかにもしてわか朝を。まわうの。國となさんと。たくむによりて。則天下にふしき。おほかりき。「コトハ」此度の不思議には。むこくのむくりかほうきして賣入とこそきこえけれ。國に有合(2ウ)

弓とり遠。ふせきたゝかひけれとも。かれらか放す毒の矢は。ふる春雨のことくに。四方鉄炮放しかけ。天地をうこかしせめければかなふへきやうのあらずして。みな中国さして引しりそく。さる間都には。公卿せんぎまち／＼たり。それ我朝と申すは。國はそくさんへんろにて。ちいさしとは申せ共。神代よりもつたはれる三つの宝是あり。一には神璽とて。大六天の魔王の印の判是あり。二に内侍所とて。天照神の御鏡なり(3オ)

。三には劍宝劍とて。出雲の國兼上の山の。大蛇の尾よりもとりし靈劍なり。是皆天下の重宝にて。代々のみよに。いこくよりも。けういおこつてあさむけ共。神國たるによりつゝ。亡國となす事もなし。「カ、ルイロ」今も天照おゝんかみの。「ツメ同」いすゞ川のすゑ尽す。いせへほうへい奉り。内侍所の御たくせんによりつゝ。討手をつかはすへしとて。諸社のほうべいりんじの。みかくら参らせ給ひけり。その中にとつても。ないし所の御たくせんは忝なふそ(3ウ)

聞えける。七つにならせ給ひし。乙女か袖にたくして。鈴ふり立てしんたくあり。むくりかむかふ日よりして。天か下のかんたちめ。たかまか原にしゆゑして。軍評定とり／＼なり。しかりとは申せ共。むくりか大将りやうさうか。しへよでうに放すとくの矢か。住吉のめされたる神馬の足にたち此疵いやさんその為に。かみの軍をのべられたり。是によつてけういともも力をえたりと賣入なり。されともかれらかふるまひはかぜふかぬまの花なるへし。いそき此たひ(4オ)

凡夫のいくさをはやめよ。神も向はせたまふへし。ほんぶの軍の太將には。左大臣か嫡男に。ゆり大臣をむくへきなり。かの仁うつ手にむくならば。諸神合力まし／＼て金剛の力をそゆべきなり。もしさもあつて下向せは鉄の弓矢をもつへきなり。をそくて此事あしかりなん。いそけ／＼としんたく有て神はあからせ給ひけり。「コトハ」しんたくなれば左大臣公光。ときの面目をほどこし。御子の百合草大しんをめして下向せよとそ仰(4ウ)

ける。輪言と申しんたくといひ。又はぶめいなりければ。吉日を撰ん

て。都出とそ聞えける。さて神託にまかせて。鉄の弓矢を持へしとて。一所をきよめ鍛冶屋とし。せい／＼を尽して造りたつる。弓も矢も鉄なり。引てはかへるへからすとて人魚の油をさしにけり。弓の長さは八尺五寸。まはりは六寸二分なり。矢つかは三尺六寸。根には八目のかぶらを入。矢数は三百六十三。すでにえらむ吉日は(5オ)

。弘仁七年丙申。二月八日に都をたつ。諸国の武士たうせん兵者。一騎ものこる所もなし。大臣殿の御せいは。三十万騎としるさる。其外以下の兵者とも。百万余人と風聞す。都を立て其日は「カ、ルフシ」八幡のお山に陣をとり。「同」明れば津の国。難波かた小屋野に。陣をとり給ふ。「サシイロ」さるほとに王城のちんじゆをはしめ奉り。いくわんをぬきかへよろひをぬし。せいいみさいの。色のうへには(5ウ)

「コトハ」夜叉羅神のかたちを現し。雲にのり霞にのり。ひとつはこつかを守らん為。又は氏子を守せんため。わか氏子／＼。「カ、ルフシ」かたちにかかけのそふことく。「同」さきにたつてそ守らる。さてかみたちの儀によりて。神風す／＼しくふきければ。筑紫に陣とるむくりとも。此よしを承はつて今度は先々ひけやとて。四万艘に取乗て。むくりこくへそ引にける。扱こそ天下も。おたやかに国も。めてたくおはします「コトハ」大臣殿(6オ)

はつくしのはかたに御陣を召れ。奏聞申されたりければ。天下の繁昌よの聞え。何事か是にしかんと。上下さ／＼めき給ふ。頗而勅使をおくたしあり。大臣とのには。筑紫の国司をたび給ふ。九国にすまんする

ものうさに。ぢたひ申されけれども。国の守りの為なり。在国せでは叶ふまじと。かさねて勅使たちけけは。力及はぬ次第とて。豊後の國府に御所をたて。御台所を宮古よりも。請し(6ウ)

下し參らせて。さながら都におとらすませ給ふ。又都には。公卿せんきまち／＼たり。むくりか太将は。よつたりときこふるを。せめて一人うちとりてもあらはこそ。軍にかちたるしは有へけれ。けういは二さうのものなれば。何と思ひてか引つらん。心のうちもさとりかたし。先高麗國へ打こえ。七百六十六國をたいらけ。其後はくさいこくを賣したかへ。其大勢をもつて。むくりをせめんする事。何のしさひ有へきとて(7オ)

。つくしへせいをそ下されける。大臣殿も吉日を撰て。むごくの討手にむかはせ給ふ。むくりを賣ん其ために。新造の大船百余艘。えた舟は教知らす。惣して舟数八万艘。むくりは四万艘にてむかひけるに。あらおびた／＼しや。一倍ましてそむかはれける。さて大臣の御座舟を。錦をもつてかざりたて。ともへに祝ふ神々に。六十余州の靈神達。籠島井神葉。雲に光りをましへつ。 「カ、ルフシ」ほうくわたいこそそふすれば(7ウ)

「同」身の毛もよたつ計なり。卯月半に大臣は。はや御座舟に召れけり。御台余波をおしみて。おなし舟にとの給へ共思ひよらすと。のたまひてをし。こそと／＼め。給ひけれ。さて舟共のともへには。五色の幣をはき立て。かみ風す／＼しく吹ければ。まえんまかひも恐るへし。昔のたとへを引ときは。神宮皇后の。新羅を賣させ給ひし時神あつめ

して、むかはれしもかくやと思ひ。知られたり。「コトハ」むごくに陣とるむくり(8オ)

とも。二相神通の者にて。天の色をきつと見て。討手のむくとさとりをなし。塩さかひへ打出。ふせいでみんと云まゝに。四万艘の舟共に。おぼくのむくりか取のつて。をめきさげんてをすほとに。日本と唐土のしほ界。ちくちか沖へ押出す。大臣殿の御座舟をも。ちくちか沖へ押出す。かれも恐てちか付す。たかひにおそれてよりもせて。五十余丁をへたてつゝ。三とせの春をそ送りける。かゝりける処に。むくりか(8ウ)

大将龍増。一陣にすゝみ出。天をひゝかす大をんにて。我等か軍の質には。霧をふらすならひそ。霧をふらせよといひければ。承ると申て。きりんこくの大將。舟のへいたにつゝ立あかり。青き息を吹出す。いかなるじゆつをかまへけん。霧と成てそふりにける。はしめはうすくふりけるか。次第くにあつくなり。月とも日ともわきまへすこくう。「」ぢやうやとなりはて一日二日にて晴すして百日百夜そふつたりける。「サン」さしもに(9オ)

たけき弓とりたちも。霧のまよひにわるひれて。弓のもとす系をたにもしらせは。引へきやうこそ。なかりけれ。「フシ同」此霧計にかされて。さうはのみくすと。ならん事うかり。なんとぞ。なげきける。「コトハ」大しん殿は無念至極におはしめし。今ならてはいつるとき。かみのちからをあふくへき。此よの暗を。はらしてみんとのためひて。うしほゝむすひ手水と召れ。「イロ」南無天照太神宮。をの

く力をそへさせ給ひ。此霧はら(9ウ)

してたひ給へと。きせいを申させ給ひければ。あらめてたや。きせいのしるしはやありて。いせの国荻ふく嵐に。きりも程なくすみよしの「フシ同」松吹風もすゝしくて。まよひの暗もしら山の。雪よりはやく。消ければいつしか鹿島。香取もよろこひの帆をそ。あけにける。「コトハ」大臣なゝめに思召し。いてく軍をはしめんとて。はし舟をろさせて召れけり。わざと大せいは思ふ子細の有とて。十八人を御ともにて。むくりか舟へかゝらせ給ふ(10オ)

「カ、ル」りやうざうくわすい是をみて。「ツメ同」蟻螂かおのといさみつゝ。鉾をとばせ鉦をなげ四方鉄炮。放しかけ天地をうこかし責けれとも。大臣ちつともおさはきなくむくりか舟へそかゝられける。舟のへさきにつかせる鉄のたてのおもてには。般若心経観音經。こんでいてそかゝれたる。そんなうたらにの中よりも。じややくひじややといふ文字か。三毒ふしきの矢さきとなつてむくりかまなこをいつふいたり。不動の真言に。かんまん(10ウ)

ふたつのほじが。鉦となつて飛かかりおほくのむくりか首をきる。観音經のめいもんに。おふいきうなんといふ文字か。金のたてと成てむくりか矢さきをふせけは。みかた一騎も手もおはず。さてこそ諸人力を得。ちんこの合戦手をくたく。大しんとの御覽して。いつのれうそと仰あつて。鉄の弓の弦音すれば。雲のうへまでひゝきあり。三百六十三筋の矢を。残りすくなくあそはせは。龍増は討れぬ。火水腹きりぬ。飛雲と走る(11オ)

雲。かれら二人は生捕れぬ。其外以下のむくり共。或は討ればらきつて。海へ入て死するもあり。四万艘に取のつたる。むくり多く討れて。わつか一萬艘になる。さのみは罪に成へしとて。起請をかゝせたいすけをき。本地へ帰させ給ひて。いや日本は軍に勝ぬるとて八萬艘の舟内の悦あふ事かきりなし。「コトハ」去間大臣殿。その假御帰朝有ならば。めてたかるへき事共を。乳母の別府を召れ。此間の長陣に。せいきを尽して覚ふる(11ウ)

なり。いつくにか嶋やあるあかりて身を休んとの御説也。別府承り。はし舟おろさせて尋けるに。波間にひとつの小嶋ありげんかいか島是なり。かの嶋を尋出し。君を上率り。すいめんあらせ申す大力のくせやらん。寝入てさうなく驚き給はて。夜日三日そまとろみける。其間に別府兄弟。徒然さのあまりにもの語をそ初ける。おとくの別府の■か申けるは。あら目出たや。此君。先度は筑紫を給はらせ給ひ。上見ぬ驚とおはせしか(12オ)

。此度は又多くのむくりをほろぼし。日本六拾六か国を。他のさまたけなく給はらせ給はん事よ。人の果報をねかはしなふ此君のやうにこそと申す。兄の別府か是を聞て。あふ其事よ君は左様に富給はし。我々はもとのまゝにてくちはてんする事の口惜さよ。いさ此君を爰にて我等か手にかけ申。御跡を一円に知行せんと申す。弟かこれを聞て。あらもつたいな御たくみや候。君の御恩をかうむりてこそ仁と成し我等そかし。古への御恩を(12ウ)

忘れ申。我等か手に申すならば天命いかてかのかれ候へき。能々案じ

給へと云。兄の別府か是を聞て。さては。汝は君と一妹や。終に此事きこえなは。我一人か科たるへし。余所にかたきはなかりけり。わとのとあふてしなんとて刀のつかに手を懸てとんてかからんとする。弟は是を見て是はさなから物にくるはせ給ふか。実とさやうに思召した。は。たとへばごろし申さすとも。生ながら此島に捨をき申して帰るならば。所はわつかの小嶋にて。十日計も御命(13オ)

の。何になからへ給ふへき。別府聞てしはらく打案じゑ面白く申つるものかな。さらは左様に仕れとて。いたはしや君をはげんかいか嶋に捨申。もとの舟に漕戻り。大船に上りいかにみかたの軍兵。きみはむくりか大将龍増か放す矢を。御きせながの引合にうけとめさせ給ひしか。うす手にて御座候らひし間。さりともくと頼をかけしるしもなく。終にむなしく成給ふ御死骸をもくがにあけ御台所の御めにかけ申度は存すれとも。諸神を祝申たる(13ウ)

御座舟にて候はとに。いかにとして入申へきと存知。いたはしなから海底に。沈め申て候なり。さて有へきにてあらされは。やあ舟共出せと下知をする。みかたの軍兵はひとへに夢の心地して。我おとらしとをし出す。惣して舟数八万艘。「カ、ル」一度に帆を上繩をとれば〔フシ同〕天地もひよく計なり。此とゑ共に大臣は〔ツメ同〕夢打さまし給ひて。たれか有と召るれと。御返じ申すものもなし。こはいかにと思召し。かつはと起させ給ひて。あたりを御覧有ければ人一人もなかりけり(14オ)

。めしたる舟を見給へは。ほを上てこそをし出せ。扱は別府か。心か

はりを仕るか。たとへは別府こそ。こゝろかはりをすると。などや以下の軍兵等。我をはつて行ぬぞやああの舟こちへの給へと。皆舟共の音高く。聞付申かたもなし。責て思ひのあまりにや。海上に飛ひたつて。息を計にをよかせ給へと舟はうき木の物なれば。風に任てはやりけり。ちから及はず大臣は「フシ同」うかりし島に。又もとり。そなた計を見送りてあきれて立せ給ひけり。早利そく(14ウ)りかいにしへ。かいがんとふに捨られしも。是にたりと申せ共。せめてそれは。ふたりにてかたり慰むかたもあり。所はわつかの小嶋にて。草木も更になかりけり。さうでんひろう。とをふして月の。出へき山もなし。朝の日はうみより出。又夕日も海に入。露の命を草の葉に。やとすへきやうなけれ共。なのりそつみて命をつぎ。うき日かづをそ送らるゝ。いたはしゝとも。中々に申。はかりも。なかりけり「コトハ」去間別府兄弟は。筑紫のはかたに舟をつけ。よろこひのきてうと(15オ)

風聞す。豊後の御所におはします。みたひ所の御よろこひ中々申はかりもなし。めつらしき曲ともを相かまへ。御入を遅しと待させ給ふ処に。別府兄弟打つて。先御所様へ参る。御台所は御覽して。あれはいつもおさきの案内申にこそ参りつらめと。人してきこしめしつぐべき事のへう遅くおほしめされ。みつからみすまぢかく御出あつて。あらめてや兄弟よ。何とて君はをそく見えさせ給ふそ。兄弟の者とも謹而しはは御返しを申さず。あやしく(15ウ)

思召れ。かさねていかにと尋させ給へは。其時別府なみたをなかつふ

ぜひにて。あら口惜や候申さんとすれば泪落る。申さすはしろしめさるましい。君はむくりか大將りやうざうと申ものとしならへくませ給ひ。二人ながら海底に沈ませ給ひてのち。又も見えさせ給はねは。その思ひのみふかふして軍に勝たるしるしも候らはす。去ながら御形見をは。給りて候とて。御きせながとかねの弓。御劔をそへて参らせ上る「サシクトキ」みたひ此よしを御覽して。是はふしきの事共かな。敵(16オ)

とくませ給はんといつ時刻に御かた見を。とめてうみに入給はん。前後不覚を申物かな。哀此者兄弟を。とつておとしてがうもんし。めしとははやとはおほせ共。はかなき女性の御事なれば心ひとつにくたしつゝ「フシ同」簾中ふかく。入給ひ。かた見の物をめしあつめ。いたき付せ給ひてりうていこかれ給ひければ。御まへ中るの女房たち一度にわつとなきければ。よその袂に。いたるまでしほる計に。あはれなり「コトハ」其後別府おゝくの軍兵を引ぐし。都へのほり(16ウ)

奏聞申たりければ。大臣殿御帰朝なき其思ひのみふかふして偏に暗のことし「クトキ」御父の左大臣御母のみたひ所。老たけよはひかたふき。さかりの御子にをくるゝ事は枯木にえたのなき風情。つれへなき命にかへはやと。なけき給へと叶はず「コトハ」其後内よりの宣旨には。大臣か帰朝するならば。日本国をと思ひつれ共。討れぬるうへ力なし。たれにけ状をおこなふへき。別府兄弟に筑紫の国司をとらするぞ。いそぎ罷帰り。後家に宮付大臣か。きやう(17オ)

やう懸にせよとのせんじなり。別府承り。あら案に相違の宣旨かな。日本国をと思ひてこそ。君をは捨置申たれ。珍しからぬつくしへとて又こそ下りけるとかや。去間別府道々あんじける様は。さもあれ我が君のみたひ所。天下無双の美人にて。わたらせ給ふにかせの便の玉章を。参らせてみんするほとに。うけ引給はゝ然へし。背き給ふ物ならば。測を尋ふし付申さはやと思ひ。玉つさねんころにこしらへ。またひ所へ参らせ上る。またひ所は都より(17ウ)

の御文と聞しめし。急ひらいて御覽せらるゝに。思ひの外に引かへて。別府か方よりの玉つさなり。「クトキ」余りの事のうたてさに。二つ三つにひつさいてかしこへかはとすてさせ給ひされはこそ君をは別府か手にかけ失ひ申て侍ふそや。今は命もおしからすと。御守り刀を召よせ。じがひをせんとし給へは。「コトハ」めのと女房承り。御道理にて御座さふらふ去ながら。命をまたふし給へとて。御守刀をうはひとり。是程ふとくしんなる所存なれば。御返しなふて(18オ)

はいか成事をかたくむへきに。たゝみつからに御任侍ふらへとて。めのと女房かそはよりも御返事をする。みとせの後の新枕は。我にかきらぬ事なれば。すまふ草も取々に。引はやなひくならひ。まみへん事は安けれ共。君のむごくへ御向の時。宇佐の宮に参り。千部の経を書よまんと。大願をまいらせ。七百余部はかきよみぬ。二百余部は書よまんと。此御宿願成就の後は。ともかくもと書て。御返事なりとて返す。使返事を給はり。いそぎ(18ウ)

てたや。扱はなびかせ給ふへきや。此御宿願成就の間は。如何程か有へきと。百年を待心地して。明しくらしてゐたりけり。「サシタキ」其後御台所敷の女房たちを召あつめさせ給ひ。つれなく命あれはこそ。かゝる事をもきくなれば。今も測せに身をなげ。跡かきくれたく思へ共。君か面影の夢うつゝに立そひ給ふ時は。しゝたる人とは見え給はず。恋はいのりのものときく。あふ迄いのち(19オ)

おしきなり。大臣殿此御帰朝なきならば。我も身をなげむなく成へし。さあらん時に御形見を。山野のちりとなさんより。貴き人にほらし跡をもとはせ申さんとて。御手馴の琵琶琴わごんしやうひちりき草紙の敷を。取あつめたつとき人に報せらる。「フシ同」四十二疋の名馬とも。みな寺々へ引れけり。三十二疋の鷹犬の。きつなをきつてそ放されける。此程有し鷹匠連をも。思ひく／＼にちらされけり。十二てうのたか共の。足(19ウ)

緒をといてそはなされける。十二てうのその中に。みとり丸と申て。青藤の有けるか君の名残を。したひてや立さる。かたも。なかりけり。「コトハ」またひ所は御らんして。あれは君の秘蔵の御鷹なるか。つかれにのそみてあれはこそ羽をたれひれふしるたるらぬ。それく／＼えじきをあたへて。はなさせ給へと有しか共。いつれも女房連にて。餌をかうやうを知らずして。はんをまるめてそなふる。此鷹うれしけにてはんをくわへ。三日三夜と申すには。大しん殿の(20オ)

御座ある。げんかいかしまに飛着ぬ。はんをは岩の上にをき。我が身もそはなる岩に羽を休めてそゐたりける。あらいたはしや大しん殿は。

たうつせる影のごとくにて。岩間の宿を立出て。汀のかたを御らんするに。この程見なれぬ鷹一もと。羽を休めてそめたりける。大臣あやしく思召し。しはしたまはずみ御覽するに。むかし手なれし翠丸なり。あまりの事のうれしさに。いそぎ近付給ひて。やあ大臣か此しにまに有とは。何とてしりてきたり(20ウ)

たるそ。「クトキ」実鳥類はかならず。五通あるとは是かとよ。扱も是なる飯はみたひ所の御わざかや。このはんをたばんよりなど言伝のふみはなきぞ。豊後にいまたましますか都へ帰り御上りか。「フシ同」いかにくとい給へは。心くるしきふせひにて。なみた計そるかへける。大しん殿は御らんして。今是非との身となりて。此はん服してあれはとて。いくほと命のなからへん。鳥類なれともあのたかの見る所こそはつかしけれ。くわでもあらでとおほしめすか。さもあれ(21オ)

みとり丸か。万里のなみを分こえたる。心さしのせつなきに。いてくさらはぶくせんとて。御手をかけさせ給ひければ。うれしけにて此鷹か。羽をたつき爪をかき。おひざのまはりに。ひれふしてものいはぬ計のふせいなり。「コトハ」大臣殿は御覽して。荒たよりもなやみとり丸。汝へか見るごとく木の葉たにもなき嶋なれば。思ひの色をも書やらて。いかはせんと仰ければ。その時此鷹雲をはるかに飛あかる。しはしもかくてとまれかし。汝ははや帰る(21ウ)

かと仰ければ。「カ、ルフシ」さはなくしてみとり丸。いつくよりとりてきたりけん。「同」ならのかしはぶ。ふくみて大臣殿に奉る。蘇

武かこくの。玉つさを。かりの翅にごとつてしも今こそ思ひ知られたれ。我も思ひはおとらしとて。御ゆびをくいぎり。このはに物をそあそはしたる。たんの落葉なりければ。たご一書付て。をしたみまるめて。鈴付にゆい付て。はや帰れよと有しかは。うれしけにてこの鷹か三日三夜と。申すには豊後の御所に。参りけり(22オ)

「コトハ」まだ早朝の事なるに。みだひ所はえんぎやうだうして御座ありけるか。みとり丸を御覽して。汝はいつくよりきたりたるそ。こくうをかけるものなれば。いたらぬ所よもあらし。物いふものとおもひなは。大臣殿の御さ所をも。なとか申さて有べきそと。御涙にむせはせ給ふ。その時此鷹御まへ近くまいり。鈴付をふりあげて。ゐなをりたり。あやしめ御覽有ければ。木の葉に血の付たるあり。急ひらいて御らんせらるゝに。「サシ」いにしへの人の言伝に(22ウ)

一しゆの哥にかく計。「イロ」とぶ鳥のあと計をは頼めきみ。うわの空なる。かせのたよりをと。「フシ」かやうによませ給ひつゝ。さては此世に大しんは。未ながらへ給ふかや。是こそ命の有しるしなれ。紙なきかたにてあれはこそ。この葉にものをあそはしたれ。硯と墨筆なければこそ。血にて物をはあそはしたれ。いさやすゝりを参らせて。おほし召れんことのはを。くわしくかゝせ申さんとて。むらさき硯に紙筆そへ。みたいをはしめ奉り。其数々の女房(23オ)

たち。我おとらしと文をかくとりあつめたる。巻物はよしなきわさとおほえたり。「コトハ」戀にこしらへ。鈴付にゆい付。かまへて今度はとく参れ。みとり丸との給ひて。又はんをまらめてそなふる。此鷹

はんをくわへて飛あかり。はね打のべて飛けるか。この間のつかれに。せいきを尽したりけるに。むらさき石のならひにて。塩の満干にしたかつて。「カ、ルフシ」時々おもくなる程に引れて次第に。さがりけり。「ツメ」いまはと思ひて飛けるに。多くのかみと文ともに。「フシ同」いや(23ウ)

露をふくみておもくなり。たゞ引にひかれつゝ。そのまゝ海に。ひたりてむなしく成そむさんなる。「サシ」嶋にまします大臣殿。たかたにも今は通はねは。何に慰給ふへきそや。「コトハ」此鷹の又も参らぬは。もしも別府か方へもれ聞え。ころされてもやあるらん。今はせいきも尽はて。時々かよふ息たにも。かきりの色とおはせしか。猶し命の捨かたくて。みるめ青のりつまんとて。汀へよろばい出給へは。なみ打かくる岩間の中に。鳥の羽すこしみゆる。大臣あやしくおほしめし(24オ)

。急引上御らんせらるゝに。「サシ」此程かよひし御鷹なり。余りの事のうたてきに。かしこにとふとまろひみて。たかを膝にかきのせ。あらむさうの有様やと。委躰を見給ふに沈むもことほり也。紫硯にかみ筆。その数々の文共は塩にみたれて見え分ねと。心閑に御覧すれば取々にこそ見えにけれ。是や女性のはかなきとは。かみ筆墨たにも有ならば。是ほと多き岩尾にて。いか程ものは書へきに硯をそゆるは何事そや。さても此鷹かきかひ高(24ウ)

麗けいたんごくへもゆられずし。今此嶋に。「フシ同」ゆられきて二度ものを思はする。必ず生を受けるもの。魂魄ふたつのたましゐあり。

こんは命途に。をもむけばはくはうき世に有とかや。我も命のつゝまりて。今をかきりの事なれば。めいとの道のしるへをして。つれて行やみとり丸我を誰にあつけて扱何となれと思ふそとて。此たかに打懸り。りうていこかれ給ひけり。かの大臣の。御なげき君に見せばやとそ思ふ。「コトハ」是は嶋にて大臣との御歎。豊後の御所(25オ)

におはしますみたひ所の御なげき。中々申計もなし。「サシ」せめて思ひの余りにや。宇佐の宮に参り七日籠り願書をかいてこめさせ給ふ。「イロ」帰命頂礼そうべうじん。もしも大臣殿帰朝のえみをふくませたまひ。二たひ御目にかゝるならば。うさのざうゑい申へし玉の宝殿みかきたて。金の扉をのへひらき。瑠璃のかうらんやり渡ししやこゝろのぎほうしみかきたて。砌の砂に金をまぜ。かべには七宝ちりばめ「ヨミモノ」池には玉の。橋をかけいがきはくわうよう。らんけいしくわひ(25ウ)

ろうと拜殿四つの廊門玉のまくさを。みかくへし。とうりやうのむねをうきやかに神殿ひさしを。ひろくといかにもやうらく。むすひさけけまんのはたは雲をわけ四せんへいはく。獅子駒犬金をもつて。みかくへし大塔としゆるをいかにも高く。雲の上に光りをはなつて作へし。四季の祭祀。へちりんじ花の御幸を。なすへきなり九品の鳥井を。高く立極楽浄土を。まなぶへしごくらく外に。更になし諸神のしよきよを。浄土とすあゆみを神にはこべ(26オ)

神道よりも。仏道にきする方便是なり。其かいていのいんもん今もく

ちせず。あらたなりほうさいかみにいたせはぼだひのかてを。つゝむ也抑かみと申は。じんそくたるを。姿とし正直たるを心とすちりのうちにましはり我等にえんをむすべり本願かきり。有ならば我をほもらし給ふなよ。敬白と書とめて。くるくゝとひんまいて。神前にとうとをき七日七夜まところまでしじやう。しんにそいのらるゝまことにかみのちかひにや。ゆきの浦の釣人。つりに沖へ出たるか南のかせにはな(26ウ)

たれて。北の沖へ流行大臣殿の御座有げんかひか嶋に吹付る。「コトハ」去間舟人は。嶋陰にあかり息をつぎ。かしこを見れば異形なる。生ものひとつ立出る。いとゝ物をそろしき折節。大臣殿を見付申。さふなく近付申さす。大臣との御覧して。あら何共なや。扱はなにかしをは。人間とは見さりけるや。何となり行事共そと。御涙にむせはせ給ふ。泪をなかし給ふ御色を見て。舟人共かちつと心かかうに成て。さもあれ汝はいかやうの生物そととへは。大臣うれしく思召し。有のまゝ(27オ)

にもかたらはやとおほしめすか。いやく。もしも別府か方の者にてありもやせんと思召し。いつはりかうそ仰ける。さん候是は一とせ。ゆり若大臣殿むこくの討手におむきの時。舟夫にとられ申。罷向ひたる者なるか。ふしきに舟に乗をくれ。大臣殿御帰朝の後は。はやみとせになると覚候。然へくは御情に。われを日本の地に付てたべかしと仰ければ。「クトキ」舟人ともか承りあら不便の次第やな。「フシ」くじする身程なにわに付物うき事のおゝいそよ。人の上とも思はねは

たすけ(27ウ)

てさらはもとらふすか風の心を知らぬなり。「コトハ」われ人の果報めてたくは。順風ねかひにいたすへし。有とも運かつきはては。猶しも遠くはなたるへし。たゝ果報をねかひ候らへ。「」大臣けにもと思召し。うしほをむすび手水と召れ。「サシイロ」あらうらめしや何とて日本の仏神は。我をは捨はて給ふらん。観音経のめいもんに。にうを大かい。けしこくふうすい。ごせんはうひようだらせつ。たとひせんはうひようだる。らせつの国におもむくとも。我一人かきねんによつて。本地の岸へ付てたべと。きねん申(28オ)

させ給へは。「カ、ル」誠に仏神も不便におほし召るゝか。「ツメ同」はつ大龍神波風とめ。俄に順風吹来る。帆柱のせみ口に。はつ大龍神ことくく。面をならべざせられたり。舟のへさきには。不動明王の。がうまの利剣を引さげて金剛けんごのさくのなわ。あくまをよせしと守護せらるゝ。かんまんふたつの御まなじり。ともには広目増長天。いしやな天。大きくわうでん。たらせんでん。風天水天火天どう。雨風浪をしつめんため。上界下かひの龍神。じやしんのとくをとゝめて。夜日三日と(28ウ)

申すには。筑紫のはかたに吹付る有難しとも中く申計もなかりけり。「コトハ」去間大臣殿は。御舟よりもあからせ給ふ。舟人申けるやうは。是迄たすけたる忠に。しはらく宮仕。恩をおくれと申す。大臣実もおほしめし。習はぬわさをし給ひて。恩をそ報し給ひける。こくないつうげの事なれば。別府の大夫かきゝ。ゆきのうらの釣人か。

けうかる物をひろいきて。養ひをくと伝きく。ぐして参れとお使たつ。其比なひかぬ木草もなし。頓てくしてそ参ける。別府立出つくくみて(29オ)

。是はけうがる物かな。人かと思れは人にもなし。鬼かと思れは鬼にてもなし。たゝがきと哉覽は是かと思。我にしはらく預よ。都へぐして上り。物笑の種となさんと。をしとゝめかとおきの翁に預け。頓而扶持をそ加へける。かの門脇の翁と申は。大臣殿の御内に。年比めしつかはれし者なれとも。いつ其ほとに引かへ。御せいもちいさく。

色も黒く。有しにかはる御風情をは。いかてか見しり申へき。され共なさけふかき夫婦にて。荒むぎふとやせをとろへたるかぎやとて。別してふちをそ加へ(29ウ)

ける。あるよのねさめに。祖父か祖母にかたりけるは。やあいかにうばごせ。先祖の君大臣殿。むごくのうつつ手におむき有て。又も見えさせ給はねは。其思ひのみふかうしてすゞろに年もよるぞとよ。扱もみだひ所は。こうのちやうやにましますよな。うばこのよしをきくよりも。されはこそとよ其事よ。「クトキ」別府とのゝみたひへ心をかけ給ひ。御玉つきの有しかとも。更になびかせ給はねは。「コトハ」無念至極におほしめし。この四五日かきき程に。まんなふか池に生なから。ふし付申(30オ)

ぬるときく。「クトキ」是に付てもうき命。つれなく今になからへて。かゝる事をもきくやとてせきあへずこそなきにけれ。「コトハ」大臣殿はものごしにてきこしめし。あら何ともなや。今まで命のおしかり

つるも。君にやあふとおもふゆへ。今は命もおしからず。あけなはいそきたつねゆき。「フシ」まんうが池に身をなげて。二世の契りになさはやとおもひ入てそおはします。「コトハ」そのゝち祖父かこそとして。やあいかにかうばごせ。おもふしきひの候に。今よりのちはいまゝしうなゝいそとそ云たりける(30ウ)

。うば此よしをきくよりも。あはれけによの中に。こゝろつよきは男子なり。「サシクトキ」祖父かやうなるつれなしこそ。しうのわかれもかなしまね。われらむかしの御なさけたゝ今のやうにおもはれて。

いかにいふともなかなそとて又。さめゝとなきにけり。「コトハ」祖父此よし聞よりも。あらやさしのうばごせや。さほとにきみを大事におもひ申さは。ものかたりしてきかすへし。かまへてうばごせ。口はしきくな。それをいかにと申すに。別府殿のうしろ見忠太は。おきなかいにてある間。みだひ(31オ)

ところのふし付られさせ給はん事を。祖父かかねてうけたまはり。是をはさていかゝはせんとおもひ。我等かありし。のひとり姫。またひと御同年にまいりあふ。御いのちにかはるへきかとなつてあれば。ひめはなゝめによろこぶて。男子女子にはかきるましい。御しうの命にかはらんこそ。のそみにて候らへ。しのひやかにと申すほとに。祖父あまりのうれしさに。みたひ所とかうし。まんうか池にしつめ。姫かゝるちやうだいに。みだひをかくし申たり。かた見は是に有そ(31ウ)

とて。教のかた見をとり出し。うばか手へこそわたしけれ。「クト

キ) 祖母はかたみを取もちて。是は夢かやうつゝかや。さりながら君をたすけ申すこそなげきの中よろこひなれ。しかりとは申せ共。人間にかきらず。生をうけぬるたくるの子をおもはぬはなきものを。三かひ一の独尊釈迦無牟如来たにも御子のらごら尊者をば。又みつげうとときたまふ。こじつてうは子をかなしみ。しゆらのなづきにはしをたつる。よるの鶴は子をかなしみ。道理のえたに(32オ)

やとらす。やぎうこうじをねふり。やぐわひのどこにふすとぎく。いきとしいき。生を受ぬるたくるの子をおもはぬはなきものを。わか身をわけし独り姫しうのいのちにかへし事うらみとはさらにおもはねと。あらおしの姫やとて。「フシ」／＼りうていこかれ鳴ければ祖父もともになくときぞ。大臣とのはきこしめし。ともにつれてしのひねの。せきとめかたき。御なみたやるかたなふそおはします。「コトハ」大臣なゝめにおほしめし。たゝ今も立出是こそいにしへの百合草若(32ウ)

大しんと名乗てきかせ。ふうふのものによるこはせはやとおほしめすか。しはしとおもふ所存にて。時節をまたせたまふ。すてにそのとし打過。あら玉月になりしかは。つくしのさいちやうはやあつまり。弓のとうをほしめて。別府とのをいはふ。去間別府よにありかほなるふせいにて。いたはしや大しん殿には。御かほにも御あし手にも。さなからこけのむし給へは。昔丸と名を付て。矢とりの役にそさしにける。大しんとのは弓場に出給ひて。爰にて(33オ)

運をためさはやとおほしめし。こゝなるとのゝゆ立のわるさよ。あそ

こなるとのゝをし手のふるうは。下手げなりとさん／＼に悪口し給ふ。別府きいて。やあいつ汝かゆみを射ならつて。さかしらを仕るそ。もとかしくは一矢いよ。さん候いたる事は候らはね共。あまりに人々のいさせ給へる御すかたの。見にくきほどに申て候。別府きいてそれほと汝かいぬゆみを。さかしらを仕るか。たゝ今ゆみをいじと申さは。宇佐八幡も御ちけんあれ。なにかしか手にかけ(33ウ)

。ぢきにきつて捨へし。とくいよとせめかくる。いたる事は候らはねとも。あまりに御説のおもく候はとに。一やいたくは候らへとも。たゝし。引へき弓か候らはす。やさしくも申すものかな。つよきゆみの所望か。よはきゆみの所望か。おなしくはつよき弓の所望にて候。やすき程の事とて。つくしにきこふるつよ弓を。十ちやうそらへ参らせければ。二三ちやうをしならへ。はら／＼と引おつて。いづれもゆみかよはくしてことをかきぬと仰けり。別府是を見て。きやつは(34オ)

くせものかな。所詮古大しんのあそはしつる。かねのゆみやをいさせてみよ。承ると申て。忝も宇佐八まんの。御ほうてんにこめ奉る。かねのゆみ矢を申をろして。大臣殿に奉る。いつしかもとよりの御だらし。かゝりの松にをしあて。ゆらりとほつてすびきし。かねの御でうづを打つかはし。まとはは御目をかけられす。別府の大夫に御目をかけ。大をんあげておほせけるは。いかにや九こくのさいちやう。我をはたれとおもふぞ。いにしへしまに(34ウ)

すてられし。百合草若大臣か。今春草ともえ出る。道理にまかせて我

や見ん 「カ、ルツメ」非道にまかせて別府や見ん。いかに／＼とありしかは。大伴諸卿松浦党。一度にはらりと畏り。君にしたかひ奉る。別府もはしりおり。降参なりと手をあわする。いかてかゆるしたまふへき。まつらたうにおほせ付。たかてこてにいましめ。かゝりの松にゆい付。自身立出給ひて。なんじかしたのさえつりにて。われにものをおもはせつる。因果の程を(35オ)

見せんとて。口のうちへ御手を入。舌をつかんで引ぬいて。かしこへかはとなげすて。くびをは七日七夜に引くびにこそせられけれ。上下万民これを見て。つらくあたり申つるものゝはてを見よやとてにくまぬものはなかりけり 「コトハ」をと／＼の別府のしんをも。おなしことく罪科あるへかりつれとも。輪にて申せしなさけの事を。有のまゝに申ければ。さらは汝をはたすくるとて。ゆきのうらへそながされける 「サシクトキ」其後に大臣殿国府の(35ウ)

ちやうやにうつらせたまふ。みたひきこしめされて。ひとへに夢のことちして。たもとをかほにをしあて。泪とともに出給ふ 「フシ同」あはぬかさきのなみたは。ことほりなれは道理なり。あふての今の。うれしさにことの葉もたえてなかりけり。何のつらさに我かなみたおさふる袖に。あまるらん 「コトハ」そのうちうさのみやの御しゆくぐわんのよし御物かたり有ければ。大しんなゝめにおほしめし。たてさせ給ふ大ぐわんは。事の數にて數ならず。金銀珠玉をこと／＼く(36オ)

ちりはめ給ひける間。ありかたしとも中／＼に。申はかりもなかりけ

り。そのうちゆきの浦の釣人に。たつぬへきしきあり。いそぎめせとてお使たつ。ゆきのうらの釣人は。いかなるうき目にかあふへきと。たゞ鬼にかみとるふせいして。こうのちやうやにまいり。庭上にかしこまる。大臣立出給ひて。あらめつらしの舟人や。いのちのしうにて有ものか。なにしに恐れを申すぞ。たゞそれへ／＼と仰有て 「サシクトキ」うれしきをもつらきをも。なとかはかんせ(36ウ)

さるへきと。御盃にさしそへて 「フシ」舌杖と対馬。兩國をうらんに下し。たひにけり 「片ツメ」門脇の翁をめし出させ給ひて。つくし九か国の惣政所たひ給ふ。おきなかひめの為に。まんなふかいけのあたりた。御寺をたて給ひて。一万町の寺領をよせさせ給ひけるとかや。翠丸かきやうやうに。みやこの乾に。神護寺と申す。みてらを立給ひけり。鷹のためにたちたればさてこそ今の世までも。高尾山とは申なれ。大じん殿の御説には(37オ)

・つくしに住居するならば。ものうき事も有なんと。みたひ所を引ぐして。みやこへのほりたまひけり。網代の輿は十二ちやう。はりこしは百余ちやう大伴諸卿松浦たう。御ともを申さるゝ。昨日迄はいやし。くも。苦丸といはれ給ひしか。けふはいつしか引かへて。七千余騎を引くして。都へのほり。父母に対面有てのち。やかて参内申さるゝ。帝あいらんまし／＼て。いかにめつらし。先度別府かのほり。討れぬるよし申せしをまことそとおもひ(37ウ)

て。勅使を下す事もなし。ふしきの命なからへ二度参内する事。一眼の龜のたまさかに浮木にあふかことくとて。日の本の將軍になさせ給

ふそ有難き。さてこそ天下泰平に。こくどあんをん。じゆみやうぢや
りをんなりとかや (38オ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛) 毛利家本、(内) 内
閣文庫本、(打) 打渡家本、(慶) 慶応大学蔵小八郎本、(直) 直熊本、
(東) 東大本

- 1オ ○その比―(慶) ナシ ○はつ瀬の寺―(慶) はせ岡寺 ○今
にはしめぬ観音の―(打) ナシ
- 1ウ ○十七にては必―(慶) 十七にて程なく
- 2ウ ○国に有合―(慶) 今度のむくりが大将はりやうざうとくはす
いとぶくもとはしるくもかれら四人が大将にて四万そのの舟ども
におほくのむくりがとりのつておめきさけんでこぐほどに筑紫の
博多へふねをつけほうくはをあげ大鼓をうち毒の矢をはなしせめ
入とこそ聞えけれ国にありあふ
- 3オ ○四方鉄砲―(慶) はこをとばせつるぎをなげしはうてつほう
○あらずして―(慶) あらずしてつくしに陣取弓取たちは
- 4ウ ○ときの面目をほどこし―(打・直) ナシ
- 5オ ○都出とそ聞えける―(慶) むこくのうつてにむかはせたまふ
○一所をきよめ―(慶) かぢの上手をめしよせ一所をきよめ
○まはりは六寸二分なり―(慶) ナシ ○矢数は三百六十三―

(直) 矢数わ三百六十三根にわ八目のかふちをいれ
5ウ ○兵者とも百万余人と風聞す―(慶) ぐん兵百万ぎには過ぎり
けり

- 6オ ○四方艘に取衆て―(打) ナシ
- 6オく7オ ○大臣殿はつくしのはかたに…公卿せんきまちくたり
―(慶) さるあひた都には又くぎやうせんぎまちくなりそれを
いかにと申すに今度の
- 6ウ ○頼而勅使をおくたしあり―(毛・内・打・直) ナシ
- 7ウ ○惣して舟数八万艘―(慶) うらくれうぶねかたせぶねそう
じてふなはずは八万ざう
- 8ウ ○さとりをなし―(慶) さとりをなし大勢つけては叶まじい
- 9オ ○一陣にすゝみ出―(慶) ふねのへいたにつつたちあかり ○
天をひゝかす大をんにて―(毛・内・打・直) ナシ、(慶) 大音上
てよばはる ○承ると申てきりんこくの大將―(慶) きりんこく
の大將承と申て、(直) きりんこくの大將
- 9ウ ○南無天照太神宮―(毛・内・打・慶・直) 南無天照皇大神宮
其外日本(慶)「日本」ナシ 六十余州の大小の神祇
- 10オ ○いてく軍をはしめんとて―(慶) ナシ ○思ふ子細の有と
て―(慶) かなふまじいとて
- 11ウ ○別府を召れ―(毛) 別夫をめして仰けるは、(慶) べつふを召
ておほせられけるは
- 12オ ○輪やある―(東) しまや有たつねよへたつねよ」ミセケチ

○君を上奉り―(毛・内・打・直)御敷草をのべ、(慶)みかたの中をばしのびやかに君をあげまいらせ御敷がはをのべいはのかどをまくらにさせ申

12ウ ○給はん事よ―(慶)たまはんことのためでたさよ ○富給はよ

―(慶)ござあらば

13ウ ○別府聞てしはらく打案じゑよ―(打・直)へつふきひてあふ、

(慶)あにのべつふが是をきいてあふ ○大給に上り―(毛・内

・慶・直)ナシ

14オ ○候ほとにいかにとして入申へきと存知―(慶)さうらへば

○惣して舟敷―(慶)一さう二さうの舟ならずそうじて舟敷は

15オ ○又夕日も海に入―(慶)又せきじつの海にいるつゆの身はた

のみなやよふけてきくも浪の音岩まの宿をたのめてやおきふすか

たもぬれまざるまれにもこととふものとは浪になかるゝむらが

もめみきはのちどりなくときはなをまたともゝこひしくていとど

あけゆくよもながく暮行日敷もおそかりけり

15ウ ○御よろこひ中々申はかりもなし―(慶)御心中なか―身に

あまりて思召す ○めつらしき曲ともを相かまへ―(打)ナシ

○あらめてたや兄弟よ―(打)あらめづらしのきやうだいや、

(慶)いかにめつらしのきやうだいや

16オ ○いかにと尋させ給へは―(打)とはせ給へは ○給りて候と

て―たまはりて候は々御らんさぶらへと

17オ ○大臣殿御帰朝なき―(慶)天下のよるこび世のはんじやう何

事か是にまざるべきと上下ざとめきたまふしかりとは申せとも大
臣殿御帰朝なき

17オ ○たれにけ状をおこなふへき―(打・慶・直)ナシ ○後家に

宮付―(慶)ナシ

18オ ○御道理にて御座さふらふ…またふし給へとて―(慶)ナシ

18ウ ○是程ふとくしんなる…たくむへきにたよ―(慶)ナシ

18ウ ○みとせの後の新枕は…まみへん事は安けれ共―(直)ナシ

○いそぎ…さふけれは―(直)別夫がかたへわたす

19オ ○さふけれは―(毛・内)参せ上る ○扱はなびかせ給ふへ

きや―(直)ナシ ○百年を待心地して―(直)ナシ

20オ ○はなさせ給へと有しか共―(慶)はなさせたまへうけたまは

るとは申されけれども ○はんをくわへ―(毛・内・打・慶・

直)飯をくはへて飛あがり ○三日三夜と申すには―(直)ナシ

20ウ ○汀のかたを御らんするに―(打)あたりを御覧ありけれは、

(慶)みきはへよるほいいでたまへば ○いそぎ近付給ひて―

(慶)いそぎたちよりたまひてあらめづらしのみどり丸や

21ウ ○飛あかるしはしも―(慶)とびあがる大臣殿は御らんじてあ

らなごりおしやみどり丸しはしも

22オ ○参りけり―(東)つきにけりへ「つき」ミセケチ、「参り」ト

傍書

22ウ ○えんぎやうだうして御座ありけるか―(打)ナシ ○あやし

め御覧有けれは―(慶)御内帷く思召す付をみたまへば

23 オ ○むらさき硯に紙筆そへ―(慶) 紫硯ゆゑんのすみかみいつかさねに筆まきそへ

23 ウ ○此鷹はんをくわへて飛あかり―(毛・内・打・慶・直) 此鷹うれしけにて飯をくわへて

24 オ ○たゞ引にひかれつゝ…ひたりて―(内) ナシ

24 ウ ○あらむさうの有様やと―(打) ナシ ○紫硯にかみ筆―(慶) むらさきすぶりゆ□んのすみ

25 オ ○我を誰にあつけて扱何となれと思ふそ―(直) ナシ

27 オ ○大臣殿を見付申―(毛・内・慶・直) 大臣殿を見つけ申かなたこなたへにけさり(慶)「にけさつて」、(打) ナシ、(東) 見つけ申しおぢて ○あら何共なや―(打・慶) ナシ

28 オ ○我を捨はて給ふらん―(慶) 我をば誰とかおもふらん

29 オ ○こくないつうげの事なれば―(打) ナシ ○別府の大夫かき―(他本) 別府の太夫が伝へ聞

29 ウ ○是はけうがる物かな―(毛・内・慶・直) 是はけふがる生者かな、(東) あらけふがるいきものかな ○をしとゞめ―(毛・内

・打・直) ナシ ○いつ其ほとに引かへ―(慶) ナシ ○色も黒く―(毛・内・打・直) 色もくろくやせおとろへさせ給ふ ○荒

むざふとやせをとろへたるかぎやとて―(打) ナシ

30 オ ○やあいかにうばごせ―(打) ナシ ○別府とのゝみたひへ心をかけ給ひ―(直) 別府殿より ○無念至極におほしめし―(直) ナシ

30 ウ ○大臣殿ものごしにて…おもひ入てそおはします―(内・打・直) ナシ ○やあいかにうばごせ―(直) ナシ ○いまくしう

なゝいそとそ云たりける―(直) なけき玉いそと云ければ

31 オ ○おもはれていかにいふともなかふそとて―(内) ナシ、(内・打・直) おもふとて ○かまへてうばごせ…それをいかにと申すに―(慶) たとへば、(直) 夫をあかにと申す

31 ウ ○是をはさて―(毛・内・打・慶・直) ナシ ○いかゞはせんとおもひ―(慶) ナシ ○祖父あまりのうれしさに―(慶) ひめ

をば

32 ウ ○大臣なゝめにおほしめし―(毛・内・打・慶・直) ナシ

33 ウ ○別府きいて―(毛・内・打・慶・直) ナシ、(東) べつふ是を見て

34 オ ○いたる事は候はねともあまりに―(毛・内・慶・直) ナシ ○御誕のおもく候ほとに―(慶) おほせにて候程に

34 ウ ○承ると申て―(毛・内・打・慶・直) 尤然るべしとて

35 オ ○畏り君にしたかひ奉る―(打) かしこまる

36 ウ ○申はかりもなかりけり―(毛・内・打・慶・直) 申にをよばざりけり ○大臣立出給ひて―(慶) さはなくして大じん殿ぢしん立出たまひて ○仰有て―(慶) おほせあつてひろゑん迄めされ

